西垣文庫
文庫10
6798

東京 神田
巖
波多野巖松堂書店

堀氏懷袖禄

文庫 10
6798

堀氏懷袖録

浅野内匠頭様御家来四十七人浪人覚書

西垣文庫

浅野内匠頭様御家来四十七人忠節之勤
誠ニ天下浪人中 林無助 村井源之進 家来二人
当事の割 十七人
和の忠臣 此
貴人の通 荒増書付
縁者他人
只今

御書付写之左ニ有之候事

一 元禄十五年午十二月十五日為御礼御登城ニ付
以書付御城ニ而御呼出被成依之御家老中并ニ
仕渡ニ付泉岳寺之請取ニ付御申被遣候 御城 被出候
御老中 上之由 委細御使ニ被成御家来相済
町奉行 上田之節 被仰出候由 御申被遣候
存寄候旨同名平八小屋ニ而食事被下候而御供ニ而十五の屋
八ツ前ニ上屋敷へ被為入候事

一 三宅藤左衛門 蒲田軍之助 平地九郎兵衛 横山弥太夫 堀内平八

向坂平之丞 此分ハ重衣付の上下ニ而有 物頭 此分ハ何も
羽織 諸士用意ニ而尾州家より御供 物頭共 並の羽織之
体ニ而御供仕候事

堀内平八 三宅藤左衛門 蒲田軍之助 平地九郎太夫
横山弥太夫 向坂平之丞 平田幸次郎 牧 七左衛門
次代九太夫 野田小三郎 志方沙之丞 富田伊之助
堀内伝之丞 林 六助 村井源之丞 池田右三郎
酒 庄之丞 堀内弥之丞 竹内平太夫 松浦縫殿
武藤平吉 寺川安之丞 本庄喜助 吉田孫四郎

一
増田主馬　波多野権八　石川源五兵衛　田中隼人之助
池部次郎兵衛　魚住甚右衛門　横井伊兵衛　宇野治左衛門
本道 下村周伯　内科 原田元沢

一 歩行之御使番
服部仁左衛門　木村権兵衛　関源右衛門　那須主吏

此外も有之候得共別ニ而ハ惟候とも大切成儀ニ而

一 二之丸者宮本番頭の御人数何れも右之通

足軽百人余　鉄砲十七挺　弓十挺　鑓六挺　総人数七百五十人

其外之小者略申

右之御人数御旗本ニ而馬上ニ而家康公御陣所御手ニ芝

江戸表被召前ニ申之処家康公御前ニ何れも被仰付

泉岳寺之住持之者不残奉驚仙石伯耆守様依之

是者宮の下ニ而諸大名之由ニ而出陣之上人数出張居

の下細川和泉守殿御出馬被成何れも相応ニ而

一 此節之足軽之者一番ニ而御座候而二ノ丸前之浦田軍之助

堀内平八郎殿伯耆守殿佐久間前ニ林田本陣旗本

小笠原御列衆ニ而十七人之御足軽衆清水本陣相詰

小頭共ニ者大手外出張以下之御人数ニ而陣中相詰居申

一 拾七人之面々伯耆守殿ゟ御渡り候て御書付御渡し候大石
内蔵助を始側迄く被為召太十七人を細川越中守に被為御預
者被仰付候衆面々を被為遣候趣共見苦敷候間
老人も有之候細家人も有之候又ハ様子承候面々の御手ニ付御当
番面々相手を被仰付候て又々被成何事も雑事等へ追而
拘候旨申渡候

一 十七人之面々御預り之頭共申付候て請取人出迎ニ而ハ御中ま
ニ請取申候刻前々を何事も様子承被成候の太丁ちん武ツ自身之
丁ちん之御供まて乗り一挺之騎馬老人ツゝ付添行ニ而御警固

中将殿面々之面使者頭ニ出合候ハ出迎ニ付参上候
頼家来付添御台所を出候見分も御警固を静ニ細川和泉守様
御一同前ゟ相戻候迄被為御前を案内之屋下出
三出迎手当前連下ゟ出向候ハ夜之始め出其ニ而御知らせ申
同道御ニて御入段者門の玄関迄御広間の御郡と以て御
二荷之間へ参り候て何事共一二度ニ足軽ニ付添御案内
静ニ参り候故程受ハ道ニ罷出候

一 右之通十七人ツゝ面々江御渡被成御家来相見申候人数申候
と被仰付候て御通ニ付御案内右之善悪相尋候家来人数申候

道も絶ず静に致候様にと皆共へも申渡候故在々迄
諸士ハ不及申候得共端々僧迄も申合同役共何も相慎之
戸をしめ暇度見候而無其事を恵み候事之外かちにて致
出願ニ罷申候様と申渡候事

一 大守様ニも是非御出可被遊旨被仰候而も御病気ニ付不とも候
ニて殊之外御機嫌ニ而御意を被為掛各之様之御神妙ニ思召候
何も是ハ大勢候而在勤ニハ不及候事ニ候とやらん難有存候
思召候而是ハ御対公儀之在勤ニ皆共也と被仰候而
何之難有事も申難尽之事ニ御家中共御請申上候

宗早様御深く御力を尽候御料理被遊候御心之御満足
ニて御入被遊候御利御出被仰候事御満足之趣皆共へ一統御礼
申上候得共何も難有存候事ニ付而も扨々御出被遊候難有
存候事

一 太守様にも夜半御供御対面被遊候ハ大守様之と御帰被遊
三人之御座ハ御様子候被仰付候御機嫌ニ而御逢被遊候
ハ御帰候ハ御城ニ而七人御詰被遊候得共大守様ニも御供被遊
御坂ニ付而御威光御供御機嫌御座候寿命院
右之趣御中御田江村荒井御申上候泉等を以て申上候

不足之儀ニ付御家来末々迄世間之風儀ニ不流御倹約
可被心懸候御質素ニ相守候様ニ被成御勝手向之御為大切ニ存
候様ニ可被申付候ニ付右ニ付而ハ御小屋衆ニ至迄
候而万端ニ御家来迄も厳敷申付候様可被申付候御家来
迄ニ至迄者表ニ相構候処如何之趣ニ付御内々ニ而申付候由

一 御家中之内林金助村井源之丞秋山三人代ニ而此度家老
席申付候木本更吉右五人ニ而毎人被申付
其節被仰付候三奉行ニ而此度一巻御渡
候ニ付一同御渡シ被仰付毎度御返答

之様子ニ而ハ御出不被成候而も於御勤ハ其外之事ニ而於其
覚悟ニ而ハ何れ之様無構大縁可有之候得共此度一巻ニ候
古今ニ及ヒ承忠臣ニ而も武士ニ而者之一番ニ候一書首肯仕下
段々議武ハ厳敷節操討死致候而も其外之働さへ只々法
静謐之時ニ而者生得ニ而者人武士之子たさへ昔此方ニ而者ハ
武士ニ而者之習ニ而ハ太平之働ニ而者天下の大小名の
家ニ何レニ而も不残ニ而来リさへ若年老共ハ御家中ニ而者
存可申ニ付此度之一巻ハ誠ニ古今不承忠臣と存候万一
手ニ怠慢教免ニ而何レも不都合 右ニ付別段之儀ニ而も手構致候

儀者御申之大勢大小身者子供ニ而出申如形馳走仕候得共
今度の一巻ニ者別而孫不罷成ニ付罷出候を可申と
仕合ニ出合候得共振舞候様ニ茂いかゝ存候而御存候私共一も
前々之家筋故奉公一巻出し不仕候ニ付申候得者流浪人様ニ而罷在
候ニ付其上ニ不思儀ニ而も如何様ニも可成候私共何とも可申不及
候間兎角申上候通此段御見計被成候様ニ振舞候様ニ被成下度
存候処如何思召候哉と相談申候得者ニ平理九郎同名平八出
申候ニ付申出候而も事済之訳ニ而も無之存候義ニ至り候得共申候
居候ハゝ此側ニ而候ニ而出申候通之趣ニ之其子夜食ニ造

一 幸の時分と候間只今振子又申候へは可有之と御手配候
又申候得者其様子承知仕罷帰り罷有候ニ仕居申候ニ付候ニ付節ニ存
九郎兵衛平八ニ被仰付候子細時分ニ申付候其手段御書付
被申候者吉田忠左衛門原惣右衛門両人を呼寄申候而御両人ニ被仰付
一 渡し居申候処一巻のあらまし承り候由ニ而申候
右之趣吃度被仰付候ニ付大石内蔵助何兔角相談の上其上被申
秋元り而任候様ニ而申候得者胡右之書付申候ての通被申候小刀之
世話ニ而候ハゝ八木市左衛門と相談と申候而も申候て度の一巻ニ相違
と承り申候前の秋九郎兵衛平八ニ一巻之荒増承り申候外

不足又前条ニ流ハ流儀ニ候ふ太之出来不足を以てしたの事ニ候也
前太夫撥乃利寄合候て写し申候と筆を後ニ述て不調法其
書付目前の由聞ニ申候事

一 上之座ニ大石内蔵助吉田忠左衛門原惣右衛門片岡源五右衛門
間瀬久太夫小野寺十内堀部弥兵衛間喜兵衛早水藤左衛門

一 下之座ニ礒貝十郎左衛門近松勘六富森助右衛門潮田又之丞
赤埴源蔵奥田孫太夫矢田五郎右衛門大石瀬左衛門
礒貝十郎左衛門ハ上之方の答ニ候ハ早水藤左衛門ト申合入替り申候

一 右十七人の流ハ何連も師範人ニ成る毎ニ磨を也性ニ住候

次第ニ心有く成り候我ホ心底を相ひし古今不変忠義武士
天下の大小名の家ニ武功ある名高き者の子孫多有之候
方一ハ殺免ニ而ハ翻し候ハ流ハ次第ニ致割候家ハ不存候
の武功ニ候ふを以て書交録も平仕ニ應し候得ハ保候
今度の一巻の流ハ何連の家ニも是非ニ可尋候事ニ候
以振子を定て其の諸振舞ニ候て次之候様ニ而天下ニ
之前盤之の分紀武士と申候ハ置計ニ候得ハ流中ニ奉庭
白心ニ掛候分の及ひ存ハ池を仕度武附富林助右衛門ニ候ハ
挙儀其路代ニ古今の世様ニ成る迄ニ未子ニ候ハ歴史ある子

尤右之趣御聞届之上江戸定居不遠慮候而者至小知之至
被申上候加増之儀被申付近年之物頭並被申付年寄申
付候様奉願上候又被申渡候者御免之上被申付度
候也右様之願書差上候處被申付候時分より一二年以前まで
驚の様子ニ付申付候江戸表の儀荒増存候京大坂
在番仕節之儀能覚申候尤一旦屋敷に罷居申候得ハ何の事
無之候得共只今之内共御家中へ申上候積り白ニ不限
何事ニ付候も変り候得ハ何事も相談人ニ御座候御中守居
出し候上之御取計之段ニ付候而御願申上候度奉存候

之段ハ私の身之為ニ而も無之候ニ付其段申上候處
様被仰出候而御身之為之御憐愍候様被成下度候
奉願候私之存命之内ニ申上候日本国中大小之神を掛け
奉申上候私儀誠ニ安心仕候武士の道ニ叶ひ申候
事ニ奉存候也其外之人ニ限り不申様ニ申上候ハ
十七人之内其外以前ニ存居申候人々ニ不限
何とやらん私ニ而しく私の心ニ任せ申候ニ付可然様
申上候ハ相違無之候得共別段ニ承り申上候
申通り申上候私儀申上候

一内藤豊助と申者ハ素来乃若年之時より手紙何連も入別して
此源志摩と申者ハ松村摂津京都勤仕心やすく存候由
申し候之此者之御中見し候と申者ハ出来
出入候て服部以前より出入候ニ先ハ武士の心得加様之事ニ付
て側ニ罷申候内藤豊助と申者ハ別而之御事ニ候
の一義ニ候ニ付定て帰り候て候中少批判と存候ニ付
老共ニ大きニ少くも致候ニ付先ツ今少し大名衆若年加様之
事ニ而無之候所御細成様ニハ人々も大名衆老中ニも
何連も不分別ニ申候所不成分ニ先ツ奥地掛り監と申者

千石之有高既仕居申候ニ度々東徳まて何角私と申合候
同時荒木十郎殿へ振舞申候て松平土佐守殿と申者ハ度々申候
江戸へ以備前様以後日本土佐守殿振舞番組ニ而土佐守
長振右衛門と申者ハ利兼相勤申候十郎殿振舞済書を数日相
勤人ともニ江戸へ罷出申候右之通ニ而合点と存候老中様方
此者之様子監を相済候ニ付小坂様と申者ハ三百石有之城代
申付右田遠江様と申者ハ宮之庭ニ而在住いや此小坂島守殿
此方ハ此者相勤候所ニ申候所之様子覚申候所
右申出之素来申候者何と申候者ハ有之候所以居候所ニ

覚へ可申由越後守殿前　如此之時分脇ニ而時を越し
中ニ茂織田原を見もろくしる者も御座候共内ニ而可在
覚召候よし中ニ茂一元亀之比原出羽小山源太夫河村何某
なとゝ申者共ハ知行も多くもらし且性能ニ而居申候東西
林ゟ其上を広ま申事到割在々内ニハ私共之様の者も召抱候
いつれも加り申候ハゝ何も可有之哉申候ハゝ力不及とて御座候由申候
乱世ニ申候ハ脇ニ委細ニ法度無之思召候義も御座候由相成不申候処にて
在之御流ニ而御普請如何ニも何れも御座候而も何れも度々
之ニ越後守何之無御座候而ハ何之左様ニ而ハ至極可在之

何事も今度何連も拝之法仕候兎角下中上様へ無之候様
共ニ兵士毎度之年歳ハ越後守子孫之者共ハ小身者よりも
身命捨候事ハ古今ニ申候之定之忠義と申肥後の先國守
加藤主計頭清正公秀吉公の御代度々の武功在之後ニハ肥後
半国之拝領以て熊本国天草合戦之時木山弾正と申者と
鑓を合せ申候其清正公一代之男を残したため申と申候
是自身手を以て働と申と古今稀なる儀ニ而左様之儀ハ
いかにも物もしく今度の儀ハ拝法仕候得ハ何れも無之皆共
第も小身者とて不自由の事のミを以て何とも在之通り

おゐて御徳澤小身如きの者楽ニ暮して侍ふ世の大身成者の
前にてもおもふ事のこそ出来るとも其のこと存じ推移候存じ内に
内蔵助殿忠義を思ひ居て候

一　助成のおもひは何れも十七人之者とも揃て一致ニ致すべく存候て引て
後には其名を皆共に残度の侍形見え定て御家ニて何か然るべき
世上の批判承り何れも能く申出し候と承りたや　おもひ置きまゐらせ
切腹致し候様ニ仰付られ右様之刻を以て屋敷にておとなしく
致しも何れも揃ておもひ置き候得共万一之儀も御坐候て十七人者ニ其に
泉岳寺へ葬り被下候得共又一致揃ても死骸抔被仕度

揃て引取ニても候はゞ必定ニ被為成候ハ泉岳寺の内空地
有之候ハゞ十七人共ニ一ツ穴ニ埋土被下候様ニ何れも願申候
地元之事主殿様御亡骸之以後ニも御死骸ニ埋申候様ニ御取計可被下候
ともこれハ存知之御事ニ候得共存ニ候節者加様之以来遠
大切之道者ハ及申候而未来ニ至るまで万一為浅意候故
菩提の為申上候間宜敷御頼申上候子孫大目付御聞届之道
中進之実文ニ進せ申候故及申候事

一　其後又吉田忠左衛門申候ハ助右衛門何れも十七人之者とも以て外
中候事以心安く心得候間別而此方よりも不及申義は以ハ大

其上ニ以世心以無ク金子出シ不和仕居候ニ付申上候ハ當セめて〻迄
思召候も指来り難様成不仕能ニ相至候ニ付段々進候ニ付申上候白銀
一重ニ大風呂敷ニ包候金四貫目ニ如之以付さ候殊ニ縁の見ハ中
すぬ候ニ手つまりて重負ニ候ハ仕度ハ始候譲之奉存大分有
無之一入兄甚致候ニ付御恩と存候よし就中候申候細繁候趣
中候處茂候も合申候ニ付申候處者無之難申候
萬ニ役人共も其者儀通候申達仕候ニ付其上ニ甚之候ニ付
至ニもし大意通候得共以無之候のてく大信者金子
難無之不及ハ成候ども此處者以難之候も貴公存之奉存候

一
及申者數ハ行末ハ以心安く存候以難ニ成行不申と申候ニ
立申候ニ付弁取候然ニ進ハ申進之何とも如何ニ因と流申候
存之通何卒進候而御心安く存候何卒ニ付申候取候然ニ進
大目付ニ以取分而審ニ至候而以而御前ニ付も難申候
御願申せ候ハ者ニ而如何成末存候誠ニ何卒摩利支
天と存候處ニ進ハ御用之城主様御事ニ呼出し申候
至候御願ハ而て一存之然ニ進心底も御言上致候
同ニ迄ニ存候何とも申候ニ甚候ニ付申上取候處者ニ候
何とも等ニ申付候ニ然ニ進候以被新小見け之候

中々如何様ニも仕候而何とそ引取申度旨申候得ハ
尤ニ候へ共進ミも不致申候
一
翌時助左衛門と申者罷出承知無之事何を以御慈悲を以被下候様
平八附助左衛門申候ハ嘉穂ニて大切成三郎を助左衛門追ニ申候
御尋ニ付と掛合ニ付候而早速仕舞を助左衛門
申候ニ付実父ニ付御家来ニ付其心を以何にも私ニハ不
兄弟共申候ニ付此度之一件内々熱左衛門ニ付仕助左衛門
兄弟共聚り候ニ付度奈穂ニて私共内意助ニ付向不申候
如此諸事相任事ニ付内藤助存寄ニ付右ニ付

相違ハ無之候先刻申候通之段ハ申上候
故とハ申候得共何分ニ付右之者共内意申存寄ニ付
仕合と申ニて申候ニ付間之ニ付是ニ付家来申候
存寄ハ申ニ付ニ付申ニ付時ニ付ニ付申ニ付
平八附九郎三郎私共ニ付遣ニ付岩之ニ付一件
私ハ平八附申候ニ付之ニ付度一件ニ付申ニ付以後
右之段仕候ニて相分ニ付申ニ付助左衛門
申候ハ平八附之ニ付中ニ付申事ニ付ニ付
申ニ付申候

一
或時矢田五郎右衛門申候は、備前長光にて同利と相見え候
申候故、いかにも若き時より好申候。同利は承知、大方見へ申
申候て、笑候様にて、拙者見申候へば、いかにも銘無之候故、極め物と
存候。私は同利かと存候て、拙者共に相見え候。私拝見仕候刀は新身
其上少し寸延て定寸の姿にて、切先より五六寸下にて打返し
無相違、此の儀内蔵助兼て中村三人にて組合申候。度々見合
書院一通りに掃除の指物、右之方の角に何者か立寄り、三人
の者に私見申候様、其上切申候様見事に御座候而相済申候へ
一振も候て申候て侍之通り、切申候様にて初太刀まで申候

一
二ノ太刀まで打申候。太刀者の下に血跡出来候由、御申候を
打合之上にて候故、先年私の刀を以て拙者に御見せ候
堀部安兵衛殿に御座候所、此刀は新刀にて御座候故、本阿弥へ遣し申候
十ケ所程見分け候て、段々申候者も出来候。別して不便に存候て子細を
此方にて若者共二代三代の勒家久安者とも、私は三代前
三代に守人分にて左衛門に十年の代に新知呉候て今一度に
内匠頭代に物頭にて太守の代に至り御座候を請申候様に相成
此節は若年者、志有候て何にても立不申候事を勤め申候
若き者の存分加せ申候様に、此節は存申候は、此元候

以手紙奉存候先祖の御位牌と此書物ニ認置申候何連も申候ハヽ
国恩を返答申候拙者儀ハ当年迄一代まて私所持致候
十四之節ニ見小姓ニ召仕然ル十七年の内ニ而勤を古き老人
因幡の志は差図も候迄ニ而立退申候別金杉橋を何連も
通り申候将監様を殿中ニ而返答ニ老母病身ニ而立寄り申候て
此度不及内蔵助和とし而何連も立寄り申候得と申候何と
存しや立寄申候と承り申候拙者様子忍置下され此段
志を承り申候下さる宅ニ参十歳老母方ニ逢ひ候て添候
此段御座候筈申候第て志老此程を御前ニ度

泉岳寺ニ而立退候節内蔵助殿初として何も出立致候
ニ付候而此立寄不申候得者御志を忘れ不申候と手紙ニ
申候も十五年之間御申候ハヽ今之所ハ定て其節ニ此段待ちての事
一ツニ者ハ打ニといふも御出仕別ニ念比ニ仕候と申候
其立申候江戸小屋共も度々申候て老母も殊ニ存知申候
早速申候一ツハ其節手紙の立寄之事ニ申候も申上候此段申候
立退て其節内蔵助初一同も立寄候て老母ハ達て留申候ても
先ツ其相果も同じ事と申第一老母存ニ無御座ニ付帰
寺坂対し不孝之者ニ候ハヽ少しの内もいか申候相共ニ存候も

難計事ニ而立寄不申候共と存候得共何事不残之迄
之ハ七ヒと後悔ニ存候よし申候様ニ被成候 被ニ成十分相与ハ別而
感入申候 多く 御座候間

一 助番之申候ハ 仙石伯耆守様ハ兼而ゟ此度一巻之次第を
以而ゟ思召候上趣意届仕迄ニ而候時節ニ至候ものをとく存候て
業内を被下候而取調候迄出させ候て 申候 相く
以後年々法形請候と存候義 気儀貝十郎殿ニ申上
之ハ物之若狭人之義ニ而仕方と別而感心申候
申候 以上

一 武時吉田忠兵衛申候ハ 私儀若キ時分より存候て軍法を
承り候共節さいもなしを而持仕居申候 家来度々是申候様
之候て私ハ内藤助ニ候 懐キ持参仕候迄ニ而候事と存候
之内ニ而差候ニ付 帳面取候由申候而有之候 以下
之懐柄ハ黒塗ニて 右之内ニ之ひの紋金物ニて存候ハ

一 四尺柄の先ハ二三寸程紋有白キ紙ニ而有之候 以後仕候
の首を不残泉岳寺へ持参候 右之されはいし入候
十七人之者共ニ長刀并刀脇指其外懐中の小脇差も紙袋ニ
仙石伯耆守様より向坂平之丞御請取之候節の出会而差出候而

ニ而候側面一説の刻家有之一説ニ座候て見へ申候通ニ有之
遣ゝ候
一 内蔵助大小共ニ腰ニ指候處見へ大乱ニ付刀の切先ニ
一尺斗血付居申候柄子実ニ振候所の様子見へ申候定て上着の儀
とも見へ候由申候のよし察申候栢葉の先ニ表鞘ニ而刃欠申候
大小共ニ黒塗ニ而鞘金揃ニ而小刀柄ニ而不揃ニ而古法を取り
上下ニ黒ニ而候家紋ニ付六月ニ出来候由ニ見へ申候沢山文子君の
忠義の深キを見へ申候同名平八を覚候様ニ申候露て有之候由
一 磯貝十郎左衛門大小共ニ黒塗ニ而鞘鯉口二三寸朱ニて筋違塗

無之候而金拵ニて紫の糸ニ下緒付居申候鼻紙袋ハ越前紀
ちりめんの縮ミニて右ハ下緒の方ハ袷ニ而内ハ琴爪壱ツ
有之候ハ此者ハ心懸ケ能キ者ニ御座候何れ此節ハ具足有之候由
一 倉橋勘六組兄ハ額有之やまて武士人余の大組兄ニ茂積不申
手傷ハ右之頭ニ而疵御座候上ニ座候後未ニ何もの切半之
ニハ無之申候故ニ深掛ケ申候前ニ後ニ泉ニ有之候ニ古疵有之見申候
入ニ田ニ付次第ニ手傷申候ハ殊ニ肉ニ而疵ハ有之候処ニ而申候得共
脇差とハ見へ申候近衆佳名加様と何し候申候
一 冨田孫太夫大小共刀ハ弐尺人余有之無地の積様ニ而居申候

一 塗木の一尺六寸の柄切柄のごとく仕立る柄なれバ小長刀の心にて
拵たる仕たるものと相見申候事

一 播州浄土寺宝蔵紙袋に入て子宝の柄絵此の竹笛あり而高
之所の笛と存る小脇差鞘中ニ入候也元ハ三寸計之廃
右之笛柄を弁と見へ申候小刀乙も六七腰有之候事

一 何連も大形大小の柄の上を一寸斗の木綿紐にて巻置候也
大小多く所持ニて切柄の心にて手の内能てよし故ニ石原法橋と刺
山川抜者前に討死の覚語大小の柄を苧縄にて巻さし
武士之由古文書ニ出ル有之古も時代を考て武士の志ハ何れ

月前と感入候事のミ書候也

一 十七人の刀脇差同名平ハ右ニ付て大小入の弟十七さや柄の
木綿風呂敷ニて大小包候ニ付主に渡ス泉岳寺へ遣候
と拵ハ能入候由也

一 何連も鍔の掛ケ九尺計り小切結するのと相見申候其内ハ大小を
数多の鞘ハ長八九寸より広さ弐寸余右の寸と見へ申候
右之右ハ長之のより能入候と鮫皮にて太刀緒ハ血付居申候大刀
さやハ多く白布ニて結ひて候平之鞘の有袖の先下の布と
乙へ名拵書付之候 有之候事

一　何者之刀脇差金拵ニ而指候者之一申候如何偽吉凶毎々新規
もの在之候得　かしこまり候者ハ無之候以後左様之儀申候ハ其
無之候得ハ人手ニ合不申候者無之候由無拵而通り者ハ一切不仕候ニ而
無之候ハハ手向仕者も　討様と内藤助左衛門申候由　右　御免被成
就中刀脇差　の儀御座候ハ少々拵ハ大方の通り付申候而も度々催
不仕候以前ハ其手前ニ而無之手ニ而左様之申候由　申候
家来申候ハ四十六人仕合也不仕候得ハ何も皆志同意之旨申候由
一　里尾孫右衛門　小比左衛門殿　乾山内ニ而　細川　桃庵　老
申候　江村　吉田忠左衛門　中通り罷居　諸士の

妻子をかくし置候ニ付　右之者共　左衛門殿　家来鈴木七左衛門
能中候　至りとの返事　且殿　出立候　共ニ志同意
之間　右之儀ハ　其以後　大石内蔵助殿ニ而
申候　此段　大石殿　申上候　申候
一　武助次男　出候ハ何も申候ハ奥田孫太夫　右　存寄　可申
よ様ニ而申候ハ秋元但馬守殿ニ罷居申候内々一宿候而仕　小
以出候ハ大石主税　子とも　何も　無事之儀　御座候　申候
以候ハ其外　同様　仕候由申候　故右之以一所の以仕合以
申候　其後　承候ハ右之趣　以年　以　何も通り申通由

に候得は外御役も勤之人父ゟ跡目同名古文相応書二冊差上の
儀も御座候外聞も相濟候ニ付而ハ十七人の面々同様ニ申上候
母子兄弟縁類之者ニ而も通し申候ニ付等ニ而茂度々被成候ニ付
後ニ者是迄能々得と心得ニ而申上候等ニ付相心得候様被仰付
不束之儀ハ急度御沙汰可有之旨兼而被仰渡候而も右之通之趣
相伺但馬守殿江御届申上候処奥田孫太夫留守取次不及承知相
各様御申立之通尤ニ候得共別而外々類ニ不相拘候様ニ被成可被
成様申上候儀ニ御座候通り申上候ニ付一切論無之処落着
候申上候かしく申上候是迄之通心得別段之事と

一 拝借之礼を申上候事
一 此時我々者何れも此節何連も江戸ニ而ハ勤候之御勤六
家来衆三郎と申もの有之候出し不被及候と存申候ニハ不被成候
御座候やと存申上候勤ハ儀も代々先祖より左様申上候処江戸ニて
者共之義も出府の名を申上候段ニ付折節無之候様相勤ニ付出府候
今度江戸ハ左様之儀一家三郎殿も御座候を勤候由申上
代り被成候て罷出候度何連も致存候由前ニ出府
への状参り相調候て出府とも申遣し候と存候事ニ通申候得は
進上仕候ニ付申上候者ハ是を是迄私儀此度出府候様被

親とも申候ハゝ嬉敷儀ニ存候忠勤候為ニも可相成候
此奉公勤候儀ニとも申候得共此奉公ハ如何ニ候間ニ存上候
思召候ニ近し如何様ニ其儀仕合勝手ニも被下候ニ付又ハ同じ
流し申候故不及力候ニ付長き事ニ付其元様ニて依ニ何とも申候
能く兼て内存助申候ても七度の一巻を内通ニ致居
申もの親子兄弟ニても他家へ勤居申候事ニ付
内通致ニ対し何ニも話ニ付候ハ内存助同様ニ被成候
申候事も無之夜も不明ニ而此儀ニ御座候上取上御座候
奉公仕候儀ニ付太く一寸之事容様ニ付候

入候ニ付明ケ五ツ時より之何とも不相分候ニ付此儀
皆て致候ニ付定而七度伯耆守殿より私共何とも被成
兼候御事承知ニ付此由を申上候事も御座候也
此度右之存寄ニ付申候ニ付相成候ハゝ此後之者何ケ様ニも可存也
等御尋の此事ニ付て候て其節如何ニ付申候得共思召之程ニ御座候
又何しも被申候を只今存候ハゝ勤ニ名をとゆるしても何とぞ内存助
御取り申上て下され候て右之通ニ付申上候事ニ付候由を承申候
平治被申候所ニ参りて夫より御座候御使ニて存候段申上候
上野の服若中の合口ニ行候て長福寺と申寺の弟子文良と申

出家勘六甥の由承り是も文良ニ逢申候勘六ハ息災のよし
咄申候去ル三月廿六日ニ在所を出立十二月廿四日迄逗留仕在所ニ
相帰り候由文良江申候ハ皆咄居候由倅共を召連候茂谷宗之丞
と札取候由につら手形も見へ不申何地江も宿致候
やと承り候得ハ其後勘六ニ太七遣咄申候大拝領致候由ニ旨
ニ夜日逗留仕出立候而豊近町家へ罷出候事の由承り候
出候得共通り紙ニ在之候由
一　潮田又之丞儀ハ松平安芸守殿御家中原田秀庵と申医
者様ハ同様ハつ内紙召出候由ニ而御座候

之吉政宇様御屋敷へも承り合候処得と在所ニ三年之忌仕候
故大石殿ニも皆筆子又之丞ニ申遣其外拝領致候由申候
一　武林内蔵助ニ承申候ハ此以町人共出家与申候於京都
萱野三平と申仁書置を残し自害仕候由承り申候と申候
内蔵助ニ申候ハ其者儀ハ京都ニ居候自分之儀ニ付浪人在生
二而居申候得共世上之一党ニ加り申志ニ在之候得共
申候ニ付何とも之咄し三平父京都浪人ニ而居申候処二年
を何方へ出し申候其の上以と謹居申候処三年
志ニ叶不申して出勤仕候門通一両日ニ自殺仕果申候よし

若キ者志を感し申候事

一 次の者ニ而若き者の感し候ハ上総矢田喜七と申者十七歳
ニ而親江戸ニ而も先年病死仕候 能中残貝十郎方ニ別而引取
申候喜七親共ニ相勤候所病死仕候ニ付 門弟内ニ而申合
養育ニ仕置申候事何とそ志を継名代を仕度と
申候ハ其上ニ而 由緒者も度々申達候ニ付申候母方
伯父様へ相談仕候 大和守様御家中ニ居申候叔父ニ母親
ニ而申候とて母子連立居申候 荒井と申者ニ初縁
とて若き者の事ニ候へハ女共ニ相果候事ニ而荒井より

一 立帰り申候様ニ而浪人ニ而今ニ其身ハ[illegible]
其後も何れも赤穂ニ而母を赤穂ニ存者ニ而
申候と度々達而難儀ニ候ニ付申候 扨々申候
父子の者志を感し申候 天草[illegible]の御恵ニ而
も後ニハ寛[illegible]上様ニ成行申候て[illegible]
武時残貝十郎申候ニ付[illegible]上様ニ[illegible]
吉田忠左衛門子吉[illegible]ニ感し[illegible]申候て申候
故郷を存候ニ而[illegible]子共[illegible]石代
平生古戦ニ大方ニ候 [illegible]友居申候 而[illegible]

右ハ松平宮内少輔様御代数馬河井又五郎喧嘩の節
家ニ而其節家ニ有之候ハ長兵衛子ニ候得共別ニ太之丞前ニ有之
写言申候処太兵衛ニ候而家来荒尾但馬守殿中段
別るに茂兵衛様御代書加へ候ニ而右但馬守殿ハ京原院様御代
右様之儀ニ而御座候様子ニ而其節之御方ニ但馬守殿供
不申候処ニヘとて其上判右様ニ候而存候処申を
是ハ申候伺候ニ不届ニ申候而又被仰候ニと度く京源院様
居候節家来及申候亡父家ニ而仰ニ書通ニ付候処右荒尾殿
とハ申候ニ付御尋之節御座候覚ニ居申候

一
十郎左衛門又者ニ而数馬足を討候者ニ而老く足軽ニ居仕申候
振子江戸表より子孫数馬所々を尋つる寄平内直訳果候判を得
参居候の様ニ成候処数馬儀ニ而民部殿御出節
荒ハ数馬伝をも内々ニ而頼之諸所ニ而太之振子を相尋候和前
広側用人ニ而勤居申候処其後の振子共荒増も存居申候由其右
毎々ニ相借寄居之候の下ニ而存知申候而一郎右衛門ニ来候不
存知候処其者別ニ罷ありて仕置候而門直訳申
之分相夜子供ニ赤穂之者共振ニ大学ニ郎仕候六ケ様ニ而
由承申候る吏ニ宇平ニ罷在て御仰付ニ候処とて申上候ハ公儀の

此法度ニ差出申候共内匠頭を傳馬町牢屋ニ
萬之介難を出し彼太之過ゟ気ニ掛て世話仕
を遣と存申候事
一 或時若党助右衛門申候ハ松の廊下の内ニ白き小袖の女の絵
三名袖にかくし七両の此屛風いかなる事と不思ハ是も古母の形見
とて屛風ニ仕立候ニ夜表向へ参り様の外塞ニ而下屋ニ仕候ニ
借用申候処仕置銭をも取申候故甚だ此尤も孫共思ひ当ニ屛て
母の衣とも申候て呼と讀申候ニ屋ニ而後忠の臣なる事ニ而と
申候手像寧記様之儀枕元ニ立也下申と此小屛風ニ而との内ニ

鶏の子を抱かへて中々出候を見請申ニ助太夫申候ハ扨々に惜
存候事此親もなき子出候ハ鹿なるもの也と申て是のあるを
承候而子此屛風の絵を見申と風情有之由申と申
此故捨さ申候ハ出来る程にて出生之人と思ひ出て心にて是程
の此事ハ心を留申し女婦の命の女房の仕方古今
無双の忠臣と申さと申處ニ此度渡当る侍中の如大
意方へ申さして此ものよき世間ヘて家の居まり粗ハ七拾
之度四十六人の内何も其之無慶忠臣ニハ増る人なり
男女とも何とも扨此大男大刀就中大石ニ而祝理と申人知事

小八五三ニ候て大男大ちから持ニて三度も大長刀にて昔の
弁慶ニも増るものと申候皆々驚き其日より毎日甲の者まで
男女の者皆見物ニ参り其歳ハ由日本大小之神楽及ぶるもの也
右之通道すから出来候皆々其町人も大ニ悦ぶ手八由何れも
侍ニ出来候事ニて誠ニ以てケ様の儀は忠ミと申けれハ六助か
和田ハ相撲大関程ニ八誠にて相成候ハつまらぬ者ニ候て一番
中にも重き儀ニ候其方を以て見事ニ致し候得者只今ニ世ニ
世の習ひにて武家町人も二度と無き事と申世の風俗
佳々出来申ハ此節も能々承り候得者掛ケ持ニ見ル大事

之儀ニ候と申候処　相ニ候ハ又別る事なく候得共
何卒右之通り私も神社ニ存居申候得共二歳候て意申候て
通達候事

一　取大場ノ子長太郎とて二歳ニて男子之の田村右京太夫様
家中黄段松村と申仁ニ而ニ居申候田屋敷の内ニ居申候下
とや茶屋小江村荒城小屋にて知人ニ成居申候由宗下小屋
ニ而右之長太郎も途中ニ度々参り菓内ニ出合別れ致候由
の子ニ初て途中より相成候家ホ町宅迄而に小為十二歳居申候
前夜人形調候と申事ニ候得十二日ニ候調ニ差加挨拶

ニ入候て宗長太郎ニ逢申候様ニ助右衛門ニ縁組させ候て
其後千度助右衛門母儀も先方ニ而取繕て出入仕候得共也無程
其ニも逢申候得共也無程先祖ハ内道取次ニ而先祖ニ而
座候而東国へ下り候て如何様ニ将ニ而其ニ而御使を公人ニて
出座候ニ付是故無人ニ付何迄も打ニ而申置候事ニ候
衣申ニ而申候筆ニ付兼て存候由何連も若き者ニ候事ニ候
筆居申候右之通助右衛門母儀無是ニ付重ニて逢申候母儀ニ付申
然ハ相て候得共ニ而掛候間助右衛門ニ而少し居申候ニ付候て
謀ニ民神ニ而候と存候子細も助右衛門ニ親族出二度逢申
根ニ而其以後右之者ニ而存之通相尋申候ニ付女人ニ而
内道取次ニ而此物語上之由ニ而居候所も見付候間
手付ニ而仕遣候迄ハ相成候上ハ右之旨助右衛門ハ男子ニ生候
右之通ハ仕候右之通女ニ付て如何様ニみ申候と申候
存生之事ニ付情不存候所ニ付て結構成ル由申候
之通ニ付候ニ付何も不存候と申候ニ付而申候事ニ候
先ハ初ニ女の仕上ニ片手付ニ而仕候と申候を承り相違女ニハ
此義出生仕り助右衛門母儀と存候一通り成敗と存し候
相果候角ニ而其後如此宗旨仕候事ニ而ニ付相改申候太

母儀ハ親父山本長兵衛と申仁何方不知千石より下口を
利なる侍と聞へ申候助太夫親父も武勇の筋ニ仁ニ候而
江戸町人福人ニ而流用等も達り候但仙台藩等と一所ニ候而
磯田浄夢咄し影ニ侍なるものゝ子ハ女子なりとも能育て
べくと申[illegible]姫も不も此旨[illegible]て申[illegible]

付札
熊本ニてもむつまじき女子ニ助太夫母義の縁故[illegible]猶後
十五歳後伯母ニ山田周庵與古笠申姫ニ候学文致候由何ぞも
読講新しく[illegible]儀ハ毎度[illegible]書等講釈
大平記等[illegible]調候母[illegible]
中ニも時代の女ニ大方[illegible]母
[illegible]

一　助太夫十九歳之時内匠殿様御使役ニ被仰付候由一ヶ日ゟ馬持被仰
付候先年水谷吉羽ニ様御居城用[illegible]殿様[illegible]
[illegible]助太夫[illegible]初而御使[illegible]被仰付[illegible]
拍子侍馬[illegible]初而[illegible]
筋の[illegible]助太夫初而[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一　助太夫咄しに上野山伏屋敷へ毎夜化物出候て何とも申合候ニ付
無拠年若キ者共竹の棒杖中墨ニ致し右の者共通り申候処
内ニ女の声いたし候て夜更候と毎夜光り見へ申候如何様の
用心にて然る事を相分り申候処勿角ほとの縫仕り候と申合
大方九尺斗ニ候て是非も様子なと踏破見候へハ庭の内
埋東ノ方ハ廣見申候書付なと有之申候所一男子て相
有へきなと候ともせ諸事て見へ申候ニ
笑申候何之色て心を動し申候ハ
佐藤十兵衛女心に

此座にて何も咄し申候以後十兵衛儀毎夜に参り申候也
咄申候ニ十兵衛儀内候処御
上下衣類山下ニ而人之内何も
心安和の衣を上下
御前衣類
衣内
此ハ断内女
皆
私

一
妻持不申候故、艶角無之候哉と女子ニ心掛色之心有
之方ニ於候書付申候へハ、一巻之手紙ニ而坂と申候
ゟ見を遣申候而、此申候故何ニ而も申候とも女ニも
手紙をつかはし申候由ハ、武蔵守別而感入申候、十郎左衛門切腹
の節、血出申候ハ、高名ニ而申候て存候所存ニ而、大小之由甚
身持能懸心持各を忘に無之ハ、然ば見苦敷不申居と存候由申候
一
大石内蔵助家来磯貝十郎左衛門と申候者、内蔵助申出
候を十郎左衛門ハ如何にも大出生にて、松村喜兵衛ニ而候
内蔵助殿ニ而申候共、度々宮を申候て、つかハし兄の分別が場にてハ
高いうと実成申候て、内蔵助赤穂を出申候、某子細ニ申候ハ
力ニ及ぬと存候、送其外子細申候、其家来申候共持もなく
しらる浪人と申候
一
何も持候へ申候而、手振出候も、浪人之風ニ而申候
能く浪人持候も、一家中共其外家之者も申候、能く心得申候
兵共申候て、度々申候ニ而勘定仕申候ニ而、能く存候、寒ク申候
逢申候と申候故、誠ニ申候て、下ニ申候、十七日ハ八ツ時分ニ座敷
を何も持出候故、様を入候と申候ハ申候ハ、皆を心得不申候
小袖羽織ニ入申候、心得不申候ハつかはし申候

一　次の座ニ而何連之内此度上使衆屋敷ヘ討入申候得ハ
儀貝十郎並ニ母此方ニ而妻子召置候此段兄弟申候ハ十郎並三
心座候家來ニ者申含置申候十郎並ニ側ニ在而居申候ハ一先
候儀相の座不致申候て家來申候ハ内ニ而私儀何も振ハ申合敷
通達擬ニ言ニ而兄弟命を惜ミ不申候間其節可申と存候
此ものと存候ハ不及是非仕合ニ候ヘハ一ハ其時十郎妻子召申候ハ
捌ニ而不残此志ニも如此難申事ニ而其段被申候揚盛をも一節
相申候て其旗振ニも被申候屋敷ニ而相詰候振分ニ候和輪ニ
候ハ此ニ而館ニ而参候大ニも無之振候間内外方旗と申事ニ而私兄ニ候て

母之一所ニ居申候ニ付私ハ門迄参候筋ニ罷出候申候
候得共ニ而申候何様居所を尋候ハ候儀ハ方ニ而旗被下候得ハ
可申候此時者之是ニ付ハ不申候而も候間候ハ存候
申候ハハ捌ニ不移仕合之事ニ候ハハ手紙を振ニ付調申紙ニも色々ニ而
此状ハ無之候と其ニ而申候捌ニ其上ニ而候日本大小の神尺申
所座ニ而三年経候と申候所中仕被居候右之事ハ申候無之旗振ニ而
家来と相心得申候ハ平小やと候ハ座を存候ハ然ハ振申候次
よも入座致候所ニ而も後藤ニ而も存旗振ニも相候如此
此よし候母并ニ兄も貞柳と申候て振候ニ付申候ハ退候ハ他ニ而も候

方右衛門ヨ宿ニ居り私申出て挨拶済て此外出度存切者
中山相挨拶ハ私申共十郎右衛門手相挨拶申て二度ニ相成
下手相も無之家来共衛と氏神の明神と候私申ニ
屋敷ニ無御洞も乃く兎角の地も溜り出菜漬を流し居り申候
蕎麦切拵居申候十郎右衛門ハ拵も切好相て此方と私申ニ
相見相振て罷り申の無御節の給仕の料理も二汁五菜ニて
出来風呂も色々も終る此所も出夜食ゟも何も候菜も見候
相も此共ニ慥ゟ此池も依相替て私申候何も振方
一汁一菜ニて共此様子申候ニ共切も家ニ候ても

二三度も出申候と覚申候と申し候處相もし候ての此地茂
荒之者と候私申ニは相済候挨拶申候此家来色々此様見へ候
此様子見申挨拶色々の出地をも挨拶十郎右衛門殿申
下を見申候そ相拵ても又此段私御座候相言
たとへ人申し心底不存善悪ても申候こなたへ来ても又ニ挨拶
十郎右衛門殿ハ以上ニ候て此地申候私情相目出
右之事者私の為ニ悪ても是も此身も候
中山へ自挨拶私申候文者此申京存候十右衛門
赤穂ハ城陸相私又申数も候使者

而して娘申し出通来一女子の書画仕らざる事に御座候と申
申す新に正一郎を呼寄せて御覧に入れ候に則調十年難儀致し
者共御噂も有らば能く申す所万事正直家向此度にて申し上候も
徒此上今人御改候て見えざる所へ至り申候に付我ら威風を流し
まゐら不申有りて甘露の御池鯉の住居の形相樹木の
仕立候て白鳥の子孫にて御座候に付色床の花生菜籠に花梅の花
様子を盛にして色絵の盆を取り一体ごとに立て掛け申候て十分に
見事御入用の菓子別に悦び申候に付境の縁に出で十五を頭に現父母
出す内別にこの心掛り申し十二歳に至り随分慥に相済内通ひ候

至極御目出度存申候
御しゅ多く在り候へば是を当家へ出張日数を相勤へく候に至迄
承り候に付西様よりも御申付下候

一 宮本前に至ると到て以愚問二度致居申候に付天庭通りを見に
二ヶ所五郎左衛門と申す者が御役者所存の稼ぎを致し候に出で居
屋坂持右衛門三宅夜に通ひ来り付御通り申候に付其外御側衆出生候
以後当家にも勝に存候のごとく小松立て笑申候此者儀の御用
然る所是をもって御免の上申付候御令旨鋸など被申付大工仕り候
出陣被仰付其外足を申付候に付在所を以て業用申付候由一先申候

次の座ニ而大ニ進ミ[illegible]富森助右衛門ニ申候ハ夫ニ順々[illegible]
小ニ御座候得共陣ル筈ニ而極ク急用[illegible]難き
住合ニ而御座候何も御用ニ大勢[illegible]様ニ[illegible]申
場内[illegible]様子[illegible]二承知[illegible]
と挨拶[illegible]扨又大ニ[illegible]一ツ之[illegible]
其座ニ而申候ハ[illegible]村[illegible]進ミ[illegible]我等も名乗申候
此為別而悦申候而[illegible]いつれも悦ひ[illegible]申候ハ
無構上の座ニ而吉田忠左衛門下ノ座ニ而富森助右衛門挨拶
[illegible]促進ニ而出申候ハ弁当[illegible]生存ニ而利根[illegible]

座ニ而[illegible]也夫ニ而仙石伯耆守殿[illegible]右弐人内蔵助申候
[illegible]存[illegible]の判より[illegible]大手前火消[illegible]の
[illegible]出申候ハ火を入候而[illegible]庭を[illegible]無構[illegible]
[illegible]の様を[illegible]たさこ[illegible]初而[illegible]
出申候[illegible]是ハ[illegible]火消も[illegible]と存
何事[illegible]抱[illegible]
難[illegible]何も[illegible]
事ニ存候事

一　極月十四日の[illegible]覚[illegible]何も[illegible]

三宅人ニ而手傷一ツ難儀致候処吉宗安枝殿と申居り
其中山田ニ而見ル差刺候ハ十八日の朝右女召殺ニ付候寺山殿小屋
ニ而打捕進候ニ付候ハ順鶴の料理役有之迚ニ而仕事方拵遊
料理方ニ而出世いたし候中番ニ相勤居候ニ付而御扶持方被下置候ニ付
並ニ候得共其後一ツ之十七人召抱ニ人座為入申候ニ付千後太田ニ
当宮石山ニ而是寺家ニ相並ヒ社家ニ候人座成さず候下ニ而有之候

杉山九兵衛并ニ為浮徳右衛門代ニ召抱ニ相成候堀居万太郎方へ迄請
與頭石右両人ハ上ニ候処御足軽ニ相成居申候軍ニ相成ル日前

一 坂本浮忠右衛門ニ而是迄並ニ居申候ニ付新ニ進杉山九兵衛并浮徳右衛門

一 鎌田軍之助長瀬伊之進堀尾万蔵并小性頭並組頭
横山五郎太夫中村助五郎八ツ当堀内平八堀元兵衛向坂
平之進吉弘京蔵八木市太夫林金助村井源之進堀内伝右衛門

一 右五人之者小性組頭成一所ニ而相勤候を何れも一ツ刀ニ而蒙
仰被任御役を被仰付候得共何れも在寺ニ而相勤申候仕合大小用
ニ而是迄并毎度御召成向キ等をつけ附置候を申上候ニ付仕
立候ニ付而ハ初の事ハ御当成壱人立会申付候ニ付大小用之儀者
山口迄并ニ是迄ニ相成候内ニ而安居相掛申候定候左様ニ出
仕合之儀毎度ニ候処是ニ付手足ニ候ハハ又其ニ付在ニ付候のみ罷居ニ

下々之者ハ作法ニ而書院を以對し無礼ニ無之様ニいたし時宜を存
仕候ニ付ても書院へ罷出候ハヽ其儀御座候ハヽ何ニ而も立居を
申候而も宜候居候事

一 手際よく有之候得ハ無礼成様ニ被成掛り候ハヽ能々分別
可有之候 五輪之品々申ても能隙取々ニ成候ハヽ一月も有之候得共延々
致候而も宜敷 拵出し申候得ハ何事も上方風儀ハ実之ものにて
三所之内五輪へ諸々の品を仕掛候ても 出来候ハヽ無之仕合も御座候
事ニ手前を拵置候ハヽ風儀の第一ハ別而悲しく候
出来候得ハ其上拵かし候ハ誠ニ不及申候へハさしあたり

不覚悟と度々申事

一 諸風儀之事 甚夜小袖殊之外之後蔵着ニ致候也
常ニ而も物好仕候事付肉薄成物を好候衣服を
申候ハ此風儀なる大宗様御在世ハ何方の事ニ而候哉と
存候而次の世となり其振舞候而も上方ニ向ひ見物仕
候而好き衣服を申候而物々敷成事共 其実なる所にて了簡
天下ニ名ハ何事も有之忠臣と申之男女之儀申候而も其の
御見しらせ候 潤色を流し申候事

一 坂源忠臣振舞ハいか様の物数寄ニ候而も忠臣之親類衆ニ

と申者ハ古越中守代児小性ニ而急比ニ罷仕候ニ付当
越中守代ニ人ヲ附年寄ニ申付置候家老ニ申付一ヶ條
嫡子ニ譲り隠居仕日本ニ而嫡子も病死致し知行ハ
只今ニ忠を盡し次男ニ而幼少ニ附ケ合候ニ付連名子
罷仕只今ニ而大方親ヲ代々とそくハ被捕ニ罷在ニ付在所ニ居候
ハとも存知申ハ家之儀事別而請合候のうち成り申及ニ而
此者日向守殿ハかし古越中守と申ニ相成候日向守殿の内
此者ハ左馬之助と中老の家之儀ハ子孫ニ至迄相続致候
天下ニ存し罷在申ハ相続ニ付候長谷助之進ハ三拾代ニ

小谷文左衛門と申者ハ高千石ニ而足軽ヲ召置足を召抱候中武士
足軽とも五十人付置大貝文左衛門と申ハ有之候ニ付側ニ
罷出仕候堀氏万石ニ罷在候堀尾山城守殿
の堀尾とも幼少ニ而人ニ叶側ニ居候ハ在所ニ而罷村
両ニ進候ハ罷在申候而代々居住の時ニ而幼少ニ付
叶申候ニ付被捕ニ罷在申とも廣く存し候ハ如何様
能候兵右衛門ハ家ニ出押之儀ニ而横山甚左衛門と
之通ニ而御出来宗を以申候天下ニ而御家来の城主ニ而
板倉内膳殿ニ而死ニ致右衛門殿又横山助之進と申ハ

物頭役者内蔵助ハ其外右内蔵助一統ニて正月頃
うち死仕候、其子息ハ忠臣ニ候、小性迄
中村右助と申者日前ニ伴左十郎と申物頭ともに討死仕
子孫共ニ浅野又左衛門と申者側ニ居仕候、定て候ニ付一統
然と存候平地九郎真佐ハと申候ニ付見候段又以来
候ニ付右仕候唯今小性仕申候者江戸平地ニ而致
中澤助右衛門ハ此者定て此度ニ而御座候
二十年計り以前播州赤川ニ而十三四の時親の首を
討候由有之、知行右仕小性候由にて候

覚申候由無之不残忠義候て御家の為相勤候
申候事

一　同名共都合四十七人之内申度此者共代々仕候由
申候と申候得ハいや是ハ申候二三人も申候由ニ候
代りまして申候又是ハ申候ハ申候由ニ候
何と心得申候定て武士の本意と存候ての事と申候
高坂検校子息ニ申候者当ニ而出申候
申候者物語加申候若き人ニ候共
検校申候ハ此度の事一巻申候古今之忠臣ニ候

可申拙僧にハ男の中にも大の男にて力も大ちからなど昔
語りに鉄比奈又ハ五郎弁慶などの様に申伝ても庭なれは
男とも可申くしは道にて習ふる押立候て可云申候へ共見うけ申候
事なれ心底ハ上より見へ不申候何とも志しも一日信心感入
致し参る毎依り留出申候盲人の世中候て杖を撫て
目前に存し候ても心得にて如此不叶事なりと申て
一 井上吉太夫中ハ今度大勢の子供を召して被為召小袖
ゆる迄随分丈夫に何も能大名とも世中をも申候様
にも庭にても蒲団も大方日本の流に而大名と十八老
各役ニ而詞に至り候ても丈夫成程に至り候
大名とては右も此度とこ浪丁の詞に至り候て又八十
妙解流様の代長詩の下迄の物とて巻物浪山
詞何れも用の為に被思召候百年坂とて坂迄
言葉にも申上三盤中迄も返言申て空に
金銀も財節とて其外迄も申て中さへ
我よりハ皆々いづれも前方の影居申候
如く諸役勤申候ハ大小共に被白人に掛け為と申候
如く其事のみにて中々の手流と申候世の中

口惜き放題と四も云ず才命を惜ず事若し以后には
更に此の生れ付とも申べき義も無之候ハヾ天道の生れ付人にてもこれ
流渡に成り行武士たるものゝ口惜き事には何事も其時ハ各
別当りたる事には平生流渡りたるものハ何事も其家々へ申付尚又
其心え且又ハ是迄心掛候事申付候事第一
一
役者共此度二階座敷座敷見物所天井
のぞき角木なり四方を見せ候て湯殿雪隠等有之候処
是迄致し来り候へ共格別に青竹の手すりに付格式を申付候
高麗縁に致し候て掛物飾り候義何事よらず平常御大名様
とハ名申掛候様之結構成る事に候へ共役者共ハ別て憚
可有之義此度く雑にも此分急度申付候処掛物の板
塀並揃候青竹揃候座敷掛物等の事前々にて
其分に成掛物之上へ土つと申物にも及ばず候
の事を可有之無用是非を得る事ハ是又二度迄に申渡し候
候に付申事古来より出来候側に居候小身成者の小屋
までも皆ある様なもの小屋なども何も住居は不及申
無用に候ても様相成る所迄とても大名を似る事無之
右の心得違ひ無之急度相守るへく候

外縁へ仕置候とも申て縁先ニ而も尤以相成不申
不残取片付候ニ而ア之衣の湯殿雪隠抔以相成候
と申事請申事定りと相心得申候

一 座鋪廻り何れも掃除仕候寒く候ても右ニ而掛候
手前ニ而小屏風立候事を不入申ニ若中山抱掛候者ハ
何れも此者人足ニ多く出張候上夜の衣ニ候ニ候 一気
着致し申候着候様可致不入事有之候ハ医者法ニ而
分まで後ニ返し候掛ハ若中山付ハ立申候

一 御膳掛候ハ若中山共内掛之者ハ此形無之候着候ニ申

若中山相伴ニ付て名別ニ出し申候何迄之ニ急度
中山ニ而ア之ニ候ハ御掛膳手ハ出しニ申候中山以
一座後同名平八立ニ申候何之大方於座之の御側衆
ハ自分の心持の者人ニハ殿中於懐中ニ而住居さむ寒ニ
候ニハ不苦事ニ而掛り被下候 御前の品と存ニ進候
御中山之内掛ニ而尤ニ中山大身掛不殿中掛候
為御ハ無之候中相之共掛所ニ中山内膳助ハ掛外
若中山共茶縮緬之ニ左ニ殿中之事ニ而候ハ
寒ニ掛ニ火鉢蒲団川ニ而申候ニ若中山掛候
ニ茶名

度〻被見候ヘハ新キ衣服留守中ニ而新規ニ入金小袖新キ
衣ト小判ニ而毎懐中為致候様入念ニ候よしにて
持参候様候も見せ候而老人も其ヲる賀慶ノ振ニ附ハ小才
ニ而情男別而口惜存候大ニ留守中倉子ハ以之外儀見苦敷
毋儀ヶ幸宗殿ニ以持参候而すて志ニ候処不快ニ付是非
幸清父幸宗与申竹光所の義ニ付見の後ニ而是ニ候て来た事
有之候別段ニ要用之義有之申

一 瀬田又之丞を以申遣候事ハ真写太鼓ヲ以申候由何やらも可申遣候
存候まじくて又〻参候申候ハ小野寺十内と申候妻女ニ候

清四郎与申者ニ致申候所いや半兵衛与申候ニ付ハ其段
以書付御尋有之候処ニ而追而つとみ候処致申候ハ其段致申候ハ
十内並へ寄り候て経之下申して無申候其段調候而
致申候事
筆の跡見候所其心得可申候由心得候ひとの筆先

一 片岡源五右衛門申候ニ付先年の以後ハ当年度度之以座
義の打続しの書の九曜の紋之衣を脱申て手風存申し
中村吉兵衛代ニ三郎左衛門申ニ付候処地ニて候法右衛門の所々

御小屋へうぶ小屋にて手水所の九曜の御座敷打かくし
の段の大サも御座にて五升程安武器も揃敷をと
三拾捌を手紙三申合屋敷取かへ三本立立候へ御もちん小
白鎧を一本二三ツ亀九曜の八まで九ツ半三申合松を武
包をも鉄屋申合乱垂ノ揃を三申合御を扨作く居候代
代く御座あり候を扨く菊り及申合候敷御屋敷先年用
三申合割東海寺の御解院為取ノ在代大石敷母戌法様
ら御ノ御うち上使申合内道取扱ひ御家中立御為を八千両くの
物数年取申にて御座候又仕上一列ニ候御申て御を申合候

傳中物語日前にて扨残三寸四方の倉の角を向ふ二付
御上御家の御座物を以いかにと申合当方の傳兵十二組ハ
一ヶ月十二匹の文字合し了毎年も八ッ迄之まて兵ノ小性六
是又扨大の文字ニ金ノ川方の日前ニ合せて右之者ハ語を
物をさらに組合の者共ハ合ニ仕せ申合物取扱を合せ相見
く二仕申合受合御座候三本立立ハ中小性九ニさらせ申合
様く御用小三郎ニ御座候ハいかにも三拾捌御代ハ御当方ハ
三本立立候へて菊の御申合扨共小三郎御座ニて揃を合候角
何をも吉中御座を揃を取申合大を御ノ了原五右衛門ハ武具を

七郎左衛門義故有之此度堅分家ニ依て伴面
申候得共櫛貫十分相違平年之頃ハ十分相違之事ニ御座候ハ併自分ニ
為致し当年ハ自由之下地ニおゐてハ何レ少ニ家入不申候間一旦之
大変ニ有之候ハヽ見込ニ付為致し庄屋ニ而ハ作合ニ申付候儀御座候旨
此段申上候ハヽ此上者入ニ而難儀至極之段申上候共
気を入可申と申上候
一 右之趣ニ付後門前ニ而母兼負担ニ而志申入候ニ付名前之儀ニ
庄屋ニ而別趣ニ而其後家来平別而十分相違之事ニ候仕候ニ付申上
其平趣意之様ニ万々可申分可為十分相違ニ付為致見神谷盛直ニ申

勤居申候者二夫の取斗ニ而形之ニ仕置候所右之様之
下地ニ候得者志之庄屋ニ而当時相当之者ニ而如何と存候
去年ニ申上候所刀服等之内相応ニ致候得共有之右之申候
相成候ニ付何事も不申候而右之方相成下候ニ而暮方等申候共世話仕候
後家妻子共ニ而も子共之為ニハ天下ニ名を顕し候十分相違
之事ニ付清之事之の作業之事ニ而此度ハ自身御座候万々一相違
如此者共ニ而同様ニ無之ニ付相成候ニ而も形之ニ仕候共可有之の見込之
下地ニ相成此上ニ而掛之候ニ而先年之事之儀ニ而其上申上度存候
以申候相勤ニ而相ニ付何とも存候而相心得ニ而志之外ニ而見込之

右趣申候處此比之風在京之面々にて御談合に及申候
十方打ちの候ハヽ此度の出陣何れも驚申候
中にも此新参と申年寄此代出家と存在京を
此関白の御志し別而如何様何れ知行所多くに被仰付
此陣之衆の内何れも此関白殿ニ御内に十方悪敷候而又別而出陣
之由被仰候拝領存候大名御歎候の後出家被成此出陣
之由此御事人ともに其内より御意後ハ天下を治め候へと被仰
被申候十方悪敷此国之御悟り候南前之理を
存候在国日本の大小之神ハ知行形之上より被申割而

御志在京存候御心得申候知行所ニ而御動一統思召候也
又ハ御参中知れ御所二つ之御用何御出思召
思召之様其被成候天下道在候清会候被申候ハ
秀頼の御座年寄出居の御方一被... 一ノ御意
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
一清名之者...三人の衆...近...三人

有之様ニ仕来り候処近来ハ思々ニ致シ候趣相聞候ニ付一ト通り
着用之儀ニ付 年頭御礼中清ニ而十徳着用ニ而年始御礼申上
仕来候得共 狩衣形之物を着用候 白羽二重之袴ヲ着し 十徳着用之
者も有之候ニ付 狩衣ニ似寄候 掛物ニ而相用 子孫ニ譲

一 十徳着用之儀ハ 此以後相成候ハヽ 申付候 社家中並ニ
十徳着用之者 此以後ハ 是迄之通 着用致し候共 不苦
申付候 社家中ニ 致シ候得共 門弟之者ハ 相用候儀 不相成候事
書院ニ而 見習之者ハ 一統 無用 社家中ハ 十徳着用
以後ハ 乱雑ニ無之様 致シ 皷太 皷役之事

一 穂高神社 相伝之 烏帽子 着用致し候 由ニ而 装束之
様ニ 装束之 色目 古雅 狩衣 着用 候処
紋附之 装束ニ 致し 候得共 方無之 社中ニ 而 着用致
相用 衣冠 候様 致し候 由 相見候
狩衣 相用 候 見苦敷 儀ニ 付 相応之 装束 着用
之事 見習 不相成 此以後 紋附 装束 一同 假名
相成 候 儀ニ 付 其旨 相心得 可申候

一 此度之趣ハ 年頭御礼 並ニ 上下着用 吉田殿へ 申達候
付 右之通 無用 装束 並ニ 紋 装束 之 外 不相成
も不相成候 狩衣 装束 紋附 之 装束 着用 可有之

是ハ兼而此志ニて居候ところ忠臣と申ハ心也然ハ
其上ニ而御座候無沙汰者何も事多く内藤助心ニ付中間将
無沙汰の者此時より相止筆ニ付候夜中出申候此間内藤庵
千郡の者ニも下中ニ而無之候上事ニ付必祇候いたし御内此度より
之一時是迄之相ニ上事多く此度之事無之鋪之縁迄
其上内藤殿庵ニ盛ニ付是迄可申上事

一 上之義ニ而扶持之無之御殿調家中例ニ供之
八組馬上鋪之付之此度馬上ニ而無沙汰之事
より家之縁不申有之申上候ハゝ宜敷

若手附之者重立候者是迄前馬之生得
四ツ時ニ登城中用ニ立申候持より
豊請鋪之前ニ地出ニ起此無
よろしく馬の無沙汰鋪大通所請
必無沙汰自然の附候事道請
居候扶持心の内若手附
此度十四江戸定金
馬無道何
人ニ大方之人周

此首はもうてかの家に成し武士とハ云ものゝ第一也大名ハみな
不器用ニ知邊なきゆへ黄昏に臨て此たひ人ハ才能あり大事な指物を心
掛て申候よし武辺を知らぬ者ハ書ミ亡父申せしは其ハ夫に捌
大かた二人なし此申さるゝ捌きの侍衆ハ道理の其ハ馬に功者なるゆへ
宗之以家の佐馬役也其外の侍衆多く在ける寄手又に先へ一ツとて角
むかしの上田吉之丞なとの組頭かも今も角田半左衛門重兼と云て
近頃に小郎昔ハ組頭上手寄手馬も錆走り石へ高兼と
馬役の者ハ中山九左衛門と申は如此頭分まれいはる寄手にて馬と
まゝ其中に古地田七代只七と云成文字好解後に申三郎子

ころ節は如形乃牧場にて自分も能く馬上にて色ゝの事
申付くる處申は指南もせし也かかると馬上にて湯漬なとや
得申は親も此者は手綱方の者なり三組に出させ申上にもと
立て馬役のものゝ手永井安芸守と申者ハ此者を知らぬ人も尚々存命
存ふると覚候ふ小男にてまれいはる寄手にて以て召
只七の事の上田吉之丞事も馬上手にて武功も一二
佐分利九之丞と申は此者は佐分利同名の者にも八佐等兵衛
多くは是は杉本宮内斎丸捌く此は後の助ハ其の捌きて
討死仕石谷なとして今もつて佐野某なと申すゝ此者吉之丞

以之作為乃座候　佐服部申にハ武人ハ御存知之通り自分
こ御座て富田信濃守并ニ御家来ニ他の勤致候由
後ニ松平新太郎殿被召候頼被申候千石被下候と記
御尋候中にハ三人共ニ相勤候大事を継候而御尋
忠臣無双能申感申候武士の事出来申候是代大坂軍記島原
こ制の六文字候其外如此家中の討死手負誠を以座候
こ其外寄候ハ武士の生し候先其の事ニ而当家の中
武士の事に候而他家の侍中罷出候老人侍候て様
其増候て御座候大事も古記有之少様と申事も不候

去て其の武士の晴候者にて知る事と知らぬハ不審
安候人も御座候老中被申候内候出其前於候老中候
出頭様候供に出来被申候手利被成候勤居申候腰掛
何も知り申中ハ御座候申御料理も下され候御前
一同家も出仕候御座候而御勝手に被下候子孫も御座候
中にハ松平大和守殿、誠様被下候而御家も万石
こ御座候而仕居申候御前召長居候様ニ御座候
除不申大事人誠様状被存候て大之通り誠様ニ不存
是様ハ存候出家老衆申候太之通の事を何候て

此時ニ至り如何と存候申候 関内殿近習衆ニ申候へ共此段相頼候
私ニも年寄中ニ而申通候て 殊ニ当家方別て 以来及不申
越中守肥後守 安芸守ニ相談候 備中近江守迄不残御懇意
且保科肥後守 土佐守 老中御役ハ勤被申候 若君御継
他所ニ年も 酒井の儀ハ如何申候とて 以之外無人の書状
を出し候而 年寄中 紀伊殿右申通 安芸守ニ相談被
前ニ而正仏備中 御免以下ニ而 越中守ニ申 貴殿其外御申し
大和守殿相添 当家の御家老其外申之 以下従覚
殿御知ニ存候 近習被仰付 家老ニ申候之 近習被成

至極と申候へ共 別御機嫌被申候而 関内殿ニ御無細
也 其中何と存申候 併此事く議論申候 能近習存候へ
可被存候 無筆候ては 私申少て 神以只今少も忘不
申候 相知申候 武士の道執後 存名を残候指上
其申候存覚申候 相極当家極被以近習と感申候御
無段関内殿存 長秋候追而申候 関内殿
ハ存紀州存候而能覚存候 大老近習候就
何の其中書 武士の善悪口上申 関内殿へ
当家の為未前以前ニ二十 被分上 罷

此等ハ万石ニ被為中ル事ニ而取候事之一儀覚え申ものニ
以前ハ四ツ候之如く経し候而様かり手於申候事
一　吉田忠左衛門承ル側家ニ而申候ハ私義保左十郎筆と
申者本多中務殿御用ニ而相勤在江戸仕候本多家
普代の者ニ而親共ハ不埒と申而御切有之候後片日夫
迄も申渡し候ものニ申ものニ而小身ニ而只今到百五十石ニ而
居候内代々御代財用前ハ在出生候仕の利出用出る
得ハ其親類之後ハ此出頭し但ハ拝領ハ其心不揃
致させ候此之上其色ニと抔ませ申候下居ニ而無御座

短気者ニ候故鮫ニ呑せ申と初而申候但小性抔ニも候
其ていろいろの事をいかにと腹を立させ無之ゟ申候其後横腹あく
如何様義申候ニ今者子孫迄小身ニ而居申候と承申候
承申候ハいかさま左様ニ候得何分ニ而も承り[illegible]
人ニ候承申候而申者古今小身ニ而居申候元禄之比
不幸一所之ニ而を率候と承申と遠州ニ而相応十郎兵衛と
申者を以て右人ニ御内通ゟ御付し如之御祝金下され候
得共夫ニ而も御承引無之如何様ニ而も済候而ものと申候
由ニ而其節御出立御座候而何事ニも無之候[illegible]ニ而候

当組者為惣代候得ハ長髪ニ而少し致居申と被申候而
寛々と此大切之儀有之候ニ付候得ハ中々承知不致候
日本之学者とも難申事ニ付右様之事ニ而相成候ニ付申候
以所作体其人之風俗を相改候様仕候ニ付申候ニ付
忠孝節義之事ニ而候ニ付而ハ私書子細ハ有之候ニ付申事
者ニ而ハ其筋之事ニ而ハ世之人ニ有之候処私方へ参候ニ付而ハ御座候ニ付
被申候ニ付而ハ大切之儀ニ付而ハ此方ニ而ハ相成候ニ付候事
右様之者ハ悦候ハ被申候由者之事ニ而ハ出来候ハ其外之事
者ニ而候ハ重々之義ニ付何ニ而も不相知事と被申候由其筋ニ而ハ

一手様之儀ニ付是を以相済候由其余何も被申候由然処使者ニ而
中々其筋之儀仕候ニ付手当致候而相済候ニ付申候而ハ其儀ニ候
大ニ通候ニ付而ハ不審と存候人々其外共ニ相知候
事ニ付候事ニ而以取計申候
一何卒也ハ前書之通御座候ニ付別而私共
度々何時成共相勤候ニ付而ハ手当並ニ御沙汰之何の
ものも此中ニ而も相分り申候何卒御沙汰之儀も
下々之者何も相成候段此一統御申付候
而右様之事共ニ付是非殊ニ一統申付候得共難相成候

依志免角可申上と存候則東熱太郎来り候て家之
ニ存申候様志の有様京都大坂御免ニ而通行所ニ居申
候故甚々残念ニ存候我等懐中仕居候事
一 正月十二日御役替被仰候当月何も五ケ所片山重兵衛若年寄
申上候御仕置之義大坂申候右衛門為御取申候死
御役筋之義大坂申候他家ニて申上候八郎殿被為ニ
相勤候得以上家老大手侍ニて御世話係若年寄中は
先年御婚礼之節太刀目代申上候若年寄御殿ニ小方
二三ケ家御由緒者先年中申上當番頭共為上席老中ニ不相成

若年寄ニ御座候故申上候事
一 何連も若年寄申候ハ堀田達之清兵衛安藤定古来度
存候先年吉田馬場ニ而仕方有之候年度申候何連も由緒も
其御留守居兵士弐人ニ而仕置相成申候来
ものこし志之係之事一触仰申候此之掛申候
いつれも可申筈之者係之清度之太之御振合ニ此志と候
役人共御世話ニ四人何れも由緒無之御志候
御手前天保之由通りと相成調申候の上方可相成候年寄
と存候申候

一　次の處ニて助右衛門申候ハ吉弘嘉兵衛殿の御先祖の御儀ニ
申上ケ候へ共申候ハ宗麟公ハ此方ニ大友之内吉弘嘉兵衛と申候
者秀吉公の時代九州合戦の時討死仕候石垣原之合戦
ニ付豊後之ニ罷出候子共之儀ハ其後小身ニ而長刀を志也
御用ニ接而切て申候ハ、ニ而参り候尚又以御座候と申候中
候而夫より右之趣を以家来共も心安御申候ハ、ニ而参り候
て申上候御意ニ候　助右衛門申候ハ是ハ存申候矢田部申候
右嘉兵衛殿御先祖ニ而御座候三河記ニ御座候矢田
佐十郎と申候者御座候と申候ハ此方ニて御座候及申候て

後ニ其申候ハ大村円蔵ト申者此者大守様ニ度の十
七人の御供仕候者矢田與兵衛先祖佐十郎と申者ニ而三河ニ而
三人之内ニ御座人の子孫ニ候ハ、其孫ニ而候御鐵砲ニ而御
候よし右ハ矢田部申ニ而是ニ而も佐十郎ハ乾申傷を負ひ御切
ニ而夫と御供仕候而も右ハ塩田源之丞ニ而も御断申候今時ハ
少当の格ニ而も其子孫も無御座候御座候のよし時分ニ少蔵
元定又御申上候事

一　此時塩田源之丞ニ而申候而夫与右衛門申候夜ハ御供ニ
而も不寝御番仕候何も肝を一ツ申候事

申候ハ定て保ニ隠居被仰付候様ニ存候処坊主ニ申候ハ
手作家ニ而ハいつまても隠居被致候様ニと申候ニ付申候ハ何連
此の内ニ隠居ニ而候ハ老人ニ而有之候故若年寄ニ成り申候故也の
候ニ暗ク候ニ病気ニ而も矢張掛り迚も御奉公相成ル
事と思召候処今後ハ[illegible]ニ而も兎角御免と呈
まいらせ申候故揚り而御出仕申候ハ御かたく存候足をかくし
申候て其後申候ハ能存つかまつり候其後[illegible]通り候御用又達
病気入候て歯切仕候と去ル頃ニ而起し候手足不叶つよく
[illegible]乱気ニ而も候ハ[illegible]御断り申上候所々申候得共又々是

此申候ハ先頃以来入候[illegible]處ニ[illegible]私儀ハ[illegible]
申候歯切仕候様ニと申候ニ付存候而掛り[illegible]
掛り候ハ[illegible]て先ニ会入致し候目出度[illegible]
無御[illegible]を入[illegible]無[illegible]仕候[illegible]
不寄[illegible]何も又[illegible]
有之ニ人[illegible]

一 何事も御座候ハ何事も[illegible]存候[illegible]
ニ而居申候[illegible]料理[illegible]料理[illegible]仕候[illegible]
候ハ[illegible]思召候ハ[illegible]何ニ而も料理[illegible]

其作法も亭主ゟ彼是申候ハヽ謝して左様ニ無之候て強而
遠慮申ハ却而其作法も料理を喰候て揉申候也先ハ手前ニて取候
覚申候然共其内ニ好ミ候ハヽ好ミ候料理可申付候
茶数寄之遊ニ遠慮候所其格候ハヽ客の方難成存候
遠慮有之候ハヽ志も無之只亭主之七さへ付たるまゝ飾好ミニて十
折々心安客ハ好候申候共尤ニ通好候申候ても何も其料理
人ニても気を付候様ニ存候故ニ如此ニ存候也

一 上之客ハ見事成を其望ニ[illegible]士中ニも何様ニも様等
候ハ夜も好候通間之席ハいつにても[illegible]人の坊ハ[illegible]

申て不出は辰申候好形を[illegible]望申[illegible]其中ニも
申候抔扨申候[illegible]宗[illegible]打[illegible]候[illegible]飾ニ[illegible]
其通慶[illegible]見[illegible]申[illegible]中ニも座主[illegible]
打[illegible]其作[illegible]申[illegible]客ハ[illegible]度々[illegible]
[illegible]心[illegible]掛[illegible]十[illegible]
客[illegible]志[illegible]其上[illegible]心慮[illegible]
其目[illegible]掛[illegible]十[illegible]掛[illegible]其大
慶[illegible]其時[illegible]度[illegible]其[illegible]
[illegible]何[illegible]何[illegible]

又申候ハ我等アノ了て継申事に候而親類も無之候
捨一向何レ之ものハ不申承候而ハ存候はづ故又言候時分
をも仕合支配結々申ハ不仕様と云事を仰もし申候由候二
こそ申文ニ京都の時側に居何をも申上候間可申置申候
得共懐中より辞世の帯を取出し見せ候

辞世　　　　　　　　　　　　　　　　間　光延

草枕むすふかりねの夢さめて常世にかへる春のあけほの

御預中秋元但馬守様御内中嶋文助と申間喜兵衛智居申候
由ニ付借受申候辞世之写遣申候右文助妻ハ又七方へ申遣候

定而所々ニハ可有之候得共扨々久敷申候て御事也ニ
所存申候ハ世間之申候又助方へ申遣候状
其外申上候様存候趣得共申候

一 吉田忠左衛門申候ハ私共も度々重而内蔵助殿へ申候大方隠居家之奥
ニ度々重ねの方に去年中世の事を思ひ幸と存候吟味仕候而
落垣なと之雪隠の植成所に人吉仕候故押破候へハ何共のを
まゝ座敷へ這入申候もの多大方ハ長屋所々仕廻申かこいの極成所を
毎方に出申候此所三人居申皿或ハ茶碗出候なと打かけ打ニ
仕候共間十次郎見付申候上野介殿ニ前に毎人立寄

かゝる所ニ外の外 御中ニ来人有 来る上野介様ニ 根岸を始め
振上ヶ斬而を 十次郎やり付 打ニ上ヶ突中ニ候ハ 古疵ニ候子
白小袖上野介様ニ 此使ニ而 上野介様ニ 極ニ而 腰而を
見ニ候而を 只中ニ 六刀斬 候る心ニ之人ニ あつゝ小口ハ心ニ之様
て此所ニ振ニ 見ニ候而 掴ひ清様も 長刀ニ而 出合中ニ候
手負ニ而候 方々を 振逃ヶ候 後ニ夜明ニて 方々を見
候ニ 今国ニ而 定奴ヶ 振揚ニ 掻候る 長刀ニ而 足を 掴ハ
相手ニ候様ニ 存て 無様 手向者 討振逃候 武ハ かま可被
ものハ 一手ニ候 只候 兼る 内蔵助中ニ 斬ニ 加ニ 手通りニ

何連も心得ニ候中ニ 掴上野介様 討ニ候 則ち 金ニ得 何も
夫ニ而 合図の笛を吹 無様ニ 集中ニ 引取者も 平右衛門 寄集候ハ
引キて 長屋の人ニ 居中ニ様ニ而 上野介様を 討ニ候ハ 合
立退ニ候 出合中ニ あつく之 二三程ニ 中ニ候 七人 出合申候
家老も 小屋ニ 扣候 門ニ 疵ヲ 有之 騒候 日の前 鐘ニ 上杉の様
相なつき 急る而 老人 五人 中内ニ 明ニ 行燈ニ 光ハ 見へ
不申 蝋燭ニ 見へ申ニ 寺坂 吉右衛門 各 掛 矢ニ 右助ニ 射出候
相済候而 故何連も 立退申候ニ 此申ニ 并ニ 存候
書かゝ申ニ 能 中ニ 先年 手もニ 火事ニ付 名前ニれ

唐物の茶振子 浅村守盛坂 二代目ニ守盛ト改 家根子上座ニ有之候ニ付
田中宗左衛門殿茶碗ニ入御申ニ付 右之茶碗ニ付候段
守盛坂此ニ而宗左衛門殿并ニ右之者共ニ而肥前焼の
茶振子深く見候由ニ付宗左衛門殿被存候所ニ而見届候事ニ而も無之候て
守盛坂心ニ常ニ茶碗ニ心懸候茶碗ニ深く模様をも見定候との
事ニて宗左衛門殿右之茶碗ニ而[illegible]の相板ニてつき合せ振子
行燈蠟燭の光りに見合せ候て其心持を相考へ此訳申候と又
咸申候得共常ニ茶碗ニ而も平生の心掛無之
申候ニ付右之心掛可有之事と申す事ニ候事

一 右之通ニ候得者御座候ニ付 最早申上ル上総守様ニ而仕合ニ奉存候 別段
世上之取沙汰ニも 表立御奉公仕候ニ付 任其内ニ入置申候
未だ泉岳寺ニ御引取ニ相成候 御殿ニ而御心中ニ而御座候て
夜明け候迄十五人之者共ニ一入 往来七ツ半頃御屋敷之者共
方々も通り候得共不見とがめ 何分中山を振子ニ而見
御儀も入不申候 何れ支度も御取揃候而相揃候事
御家之忠義深く以て天下の御為ニと存候由申上候 御仰
十五人之者共御供仕 其御様子見候ハ 此御物武具ハ御馬ニて持運び
御家老衆ニハ不存候処 二三人之者御聞ニ付候由仰承

そうらに似て候と女が持たる火事場挑灯出す者とて思ひ辻番所
にて太田家と有るに何と致しても泉岳寺へは参りいらぬ
仕合難義と存候由に候なり

一 お主此内に高田軍兵衛と申小知なる者にて候、其赤穂浪人
と等申して大事の君の仇を討たれし家来に実は一巻に
かゝりあれかゝりけり然ども存て五兵衛可申と存て泉岳寺
立退にて申斯、三田八幡へ立所見て今迄名に何と相聞申通然に
堀部弥兵衛申様に何と致しても是非志をとげ上野へ参るとて只今泉岳
寺へ挑灯見申にて候とて申候はゞ参り直に挑灯何とも候なれど

承り候に付右之品を三田八幡へ社家江参り本意を遂候と承れ
其との志をそれは挑灯同然にて有之候と申て後軍兵衛泉岳寺へ
酒樽を致候而門番を頼内意相願候何とぞ寸志之程通し申度候
何持参候而門番相頼候得ば、門番聞届け夜中に候ば通は申さず、若者共
之事を見る持し士でさやめて是は幸之事と存候て一同入候て
殺し可申刀をさし申候て此事にて候ははや挑灯其儘に候然りと存て内蔵助
挑灯其者共挑灯もたせ申候て踏数て此事苦敷事に候軍兵衛請
承り呼入何とも存寄申候て泉岳寺へ挑灯参り候よし
門前へ中罷出でありと申候は挑灯は今の仁は定て平生何に

語に仕候ても能場所にて能者と云人ありて以て尋申能の仁にる
下手能申候ハいかにも手を通らせ内道取家来ニ而大方
備る者何を動ても能勤候て中々是のミニ而在其節ハ
拙申候ハ必ず覚申ニ室見入申者ハ本心の実義而世流の
上手もしらず稽古ハ猿楽古今道及候性格く上手と云此頃
人ハ中に居られ必ず主人をも頼候ハ本ふ不実ニ而能登と
申付候つる是ハ手足にて能をも見候出申候叔者加へ之申候
同者古文武馬道々此申候吉原殿様御代於江戸入割く
候ぢん六ヶ敷御用ニ而去る仁候拝ニ與候る御賞状之馬有く

此心ニ付ては場所柄申候ハ手様ハ此意ニ被致者ハ何ニ不仕見知候得
以気味よく思召候一不器仕其身を覚て御意等ニ候
手附ふ文武事此小性ニ而此道ニ入候内ニ而見覚て能覚申
諸国ニ而名人達御申候者ニ家来共能等居申候ぬるまて手仁様ニ
之迄そくさに居申候て有之此ハ手前のもし人流も諸申候覚申候
諸大名の内まて名有之大切の侍無之くらの也上大工の挽木を
用申之未かニて候も古く御見大小共ニ史ニに用申様ニ名物ニを
通り之正成殿との申中候し能礼も家来不成てハ何る不調法る
者ニ而在仕候も一不ニ而在仕候共世ニ其者之流用場所ニ意不尤

仕候て一下向キ御用ニ立可申と思召候処ニ出家ニ被成候て武士の冥加
ニ尽キ候事無念ニ存候ニ付諫言ニ及申候得共承引無之
生来も存候大ニ仁ニ候へハ若輩も絶候て名も出申候
当西京の時分も見合キ人の中たる仁ニ候て宿老上ノ男ニ候

一 内蔵助ハ御預りし切腹胡か髪を捨候由承申候内二三人
殊ニ存候捨世申候様りし候ハ二言を捨て申ニも粗の髪
のまゝ存居申候様申候ハ庵の結を一宿ニ仕捨候
いつまでも人持遁世のと存て未久く手傳ニ罷り出てハ不残
御結を作りて御人持能く存候と申候ハ其身をも何とも捨世申候

一 堀部弥兵衛申候ハ浅野越中守様ニ大石壱人と申私同年七
拾八ニ罷成候前廣吉宗女の方ニ勤居申唯今大学様越中
守様ニ大石何太夫として時の知行より被下御側御用人ニて居申候者ニ
候へハ見及居申候覚度私ニ志篤申候て右之壱人も同じ未たと申候
様ニ在別此事ハ静ニ手ニ合て呈居申候反是不叶不申候
と申候得ハ何ニ候故御道筋中御備ニ罷り御無人ニ御座候
御出候て古郷を離れ能覚悟申候と存申候様ハ御無ハ属も達
可申候定而人数も多申候御居て存申候御為御徳無之
成り候御出人多く可申出と申候処大御屋敷御座候故不残

右ハ源之儀某申上候様承り候只幸之人ニ而御座候
三平三人ニ而也毎年御座候御家之御代々ニ御譜代ニ而御座候三人
此ノ源之儀ハ若年時分ニ仰付ル事共候ヘ初而其元仕候時
相続致候へ一家を持申候御家目只今ニ居申候御奉公勤
候ハ古来之女而見之少々仕候得共勤居申勤助殺之
又右之大事之御家并相申候勤助ハ眼覚メ親方ニ一而ニ
候所御家ニ相申候相ハ相続之御座候勤助と呆申候
只今之孫之代ニ至り御家ニ勤居申候由申候其上人ニ申候ハ泉岳
寺ニて右之儀一寺之者共ニ切腹相済候播相成候

筆ニ而此儀仕調相成候内蔵助召込御家之御傍流候
而皇御一統筆及申候相続ニて御座候やと存申候いかゝ
存候自然而皇仕候ハヽいかゝ存候相違無御座候越中
守殿御着方ニ御座候て傍らも方ニ居申候大勢之召抱ニ
此思召ハ定之御指之御座候て右之筆ニ申候毎々ハ所
家来ニ居申候泉岳寺ニ揃相成候と申候筆之六誰
候て申候候御座之相成候而下之儀ニ武士大小
共ニ寺之賽物ニ成候傍届勤申候候子孫申候
而皇此仕定子孫ニ譲り申候心底之中ニ揃申

召出され候ハヽ御暇以後ハ被成下ましく候得共私共武士大小帯候而
御座候得ハ主税とも申候右之人ニ大石内蔵助殿と同名のもの
大石殿御遺言にハ大作又ニ指て兼而ハ内蔵助甲斐殿ハ寺坂人
泉岳寺之儀ハ別而心安く存候方々定而存候て此存
とても存居候とも被申候而隠し置候ハヽ何方ニ而も存居候て
此存候ニ付而ハ申上候右ニ付而ハ内蔵助殿被申
候ニ付同所ニ而武林唯七申候ハ右ニ付而ハ寺坂吉右衛門殿ニ於て
武林唯七ハ右之内蔵助殿被申候ニ付見候様ニ申候
申候ハ此度ニ付而ハ申候内蔵助殿何事も申ニ付而候得共則

候得ハ彼仁ハ下ニ居候而御申候ハ拙者ハ独り候而申候ニ付
存候ハヽ能々承知仕候て存候も去ル仕方ニ対し
一 助右衛門申候ハ此方ハ兼而一存申候右之旨存
候ハ拙者共何卒も好み申候て存念候而何や存候の段
池之端も存候ニ付加り候様ニ存居候者ハ名代ニ而
手前而道中より大勢入込候ニ付相成候而御座候
其後ハ二三人ニ而召連候ニ申候ニ付毎度下宿ニ参り候ニ付
度々申聞候ニ付御座候
一 私共ニ而御座候儀ハ夜分ニ申候ニ付参り候

一古キ羽織の裏茶の行色を手製、或ハ見事仕残し
ゟ取候所其儀古歌掛候側ニ書付所ニハ何とやら押して染
と申候ニ付而ハ見直し形容とかやと申候ニ若キ者共の相手
之中年とも申候ハ相と縫ハ相違事浅黄の一円合と縫出来
とて尋候へ共さしも見及参候へハ種々相違有之道理候ハ無御
座候ニ限り毎度時ニ尤やり方仕立の上ニて記し上七丈ニ付而候
三所様御同役八代ハ古流の内羽織形頭取様ニ而伯父が
其後ハ彼ゟ従江戸下候而八代之子孫又ニ何分ノ姓ノの
外伽ニ而宗和と申者幾様当座七弟子由 並ニ羽織形有之

縫中羽織之事ニ付而ハ色を以説候得共ハ掛け候而無茂羽織
茶家ハ其儀候之事ニ茂此事の義を宗和宗ニ和や上かハかふ
畑ニ而茂服とて江戸ニ而其後ハ本ニ而馬乗り候ハ中の紅染ニ
之て尤也ハ中ニ申候ハ三所様御物縫ニ付而候ニ羽織より
外ニ其の形ニ而小袖ニ而も有之長ク仕立候而羽織如
無程ハ候ハ何之仕度ハ其ニ而御羽織小目ニ而御軍法
を以申候ハ其上何ハ其附く御意ニ被為候ハ其之
旨を見かれ其座候而御家関東ニ御目見ニ被為候
して其節ハ御供之者ハ馬上ニ而御太刀持ニ而着座候

扨又三郎か子越中ノ守初ハ中書ノ時ハこれもやるとこ事
の信玄両雄を中ニして大争へハ取こしとく二如しの中ニ仕
二十ハ時中ニ而越中軍法を習ヒ六度ニ而能く人をはし信元も能ク覚
仕其上二而信玄の軍法を何れも不知能く是中ニものとの取之と善
いたして扨又此ニ無双し亡父中将ハ手引二盛ニ請けて下中出
由て此皆両とく越後を取り若能く此葉も頭書遠中扶
宗もはや年々此にて三十八年ニ越後ハ若き時分ハ三友ニ方能意
大か四季も越前の在を中ニ候也只下ハ此の下とくえ其とう
越後ハ家老ニ而年々主信越ニ動中信元大ゆ元ニ御堅殿様

越後ハ右衛門と縁をむすび此度ハ天下一と越後中を呼覚へ居申候
兵加ニ付御いまた出陣ニ而用其上も矢と仕候ニ而近衛家を取受て
越後守も猶々御意を承候大将元ニ其ニ而居中申候ニ付謹
先陣ハ志ニて家柄ニ付て申候武田信玄公四代の家ニ而能
左も好申者ハ女信元を取られ候而是一事候ハ別而乱世之時分能き
返報と存候杖を肩ニ打寄ニ而刻火縄中ニ付而右之所ニ出
出兵を取申候故 神以扨又ハ遠近仕候事

一 何を遠ニたかこし好み候而能々ると此 御事ニ一と堀尾方へ遣
扨ハ中ニ而 大守様 越後ハ中ニ而いかにも若く存候二而申候ニ付

何れも拙き所を削り能き所を入たるにて候懐中仕舞置
申候何れも所望に候はゝ[illegible]小児幸十四
才なるを以[illegible]たゝに書る筆はかりにて[illegible]多く[illegible]近頃
御側に居る小者にて[illegible]何れも[illegible]人[illegible]申候[illegible]
無用の[illegible]此後[illegible]古人と申候[illegible]
速筆[illegible]ことを[illegible]上手又[illegible]爰を古人とは
と称[illegible]候[illegible]二人の書物書きたる
何も[illegible]見[illegible]筆[illegible]
近年[illegible]何も申候由返[illegible]

能き所へ出し何れも拙き[illegible]所を入れ
[illegible]一文[illegible]新[illegible]たる二人[illegible]
近年は[illegible]江戸の筆に[illegible]たる[illegible]
[illegible]筆[illegible]大[illegible]
江戸[illegible]
[illegible]
二人は何れも[illegible]
[illegible]
大[illegible]何れも[illegible]古人[illegible]

拙者儀天下ニ名を顕し候實證加減の義申者有之候哉と
存候處別而大慶ニ存候故申上候
一 去月末ニ江村清蔵共ニ逢候而仕合ニ而内拙者ハ無之
以後拙者ニ参候様申候ニ而存候以而御座候而以為候所様無之
以御座候得共委細相座ニ候旨申ニ候出来候様申候而被成
為何れ之ニ相成候様御座候ニ付申候而御座候得と申ニ付御心底
ニ存候ハ御知加無之候而能之ニ及出候と何事ニ存候
以為之儀ニ付候様議之父母中ニ申候而返答ニ而存村手候
御座候仕持出申候者前室中ニ村手貫病人ニ而存候之人ニ而

及し申候旨御座候之内者ハ思召候江村清蔵江被仰出候ニ付
遂而御座候ハ生之得共無之相成候得而江村罷出候様清蔵
と申候而蔵書之内記有之候ニ付御座候而被成候而
以御序ニ掛度と申候而知加無之候而存候以御座候而
申候只内存之趣を以何れ之拙者も感之而相手に而側ニ奉存
いくつも以無之事申候十二日ニ相成と申候ハ之仕出来候而
及御座候と申候様之甚様也と申候清蔵義申候
相手候何れ之清蔵を度ニ申出候而御座ニ申上候
内存御知之上而同年之手前拙者中老ハ存出申候申候

御尋ニ付て右之外手續委細申上候ニ付[illegible]ハ當代
[illegible]當[illegible]相違無御座候依之其中[illegible]同様之儀
居候ニ付而者不束ニ御座候事

一 内藤勘何某近年中ハ[illegible]無[illegible]通り相分り[illegible]候
[illegible]手前[illegible]ニ付[illegible]仕度[illegible]中ニ相成[illegible]
中ニハ皆共代り相續中ニ[illegible]ニ付[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]來ル[illegible]ニ[illegible]

其儀[illegible]仕度[illegible]且[illegible]日本大小之[illegible]
[illegible]右之通之[illegible]中ニ而[illegible]
心得[illegible]ニ而[illegible]ハ[illegible]
[illegible]仕[illegible]大石之[illegible]
[illegible]
[illegible]
日[illegible]
[illegible]三人[illegible]
[illegible]中[illegible]六[illegible]

一　不届思入候段左之通申候

正月初旬次之夜強盛候て杉野吉田忠左衛門出居申候

節ニ兵ヶ場ハ名乗代々御座町人ニ候得ハ能致候ニ付其外に申

成候而若内野元道殿と申候処田舎介江戸中申参候ニ付

忠義之御道も未之日用之者迄申参候田舎六ヶ所之民居林

亭主助致ニ付作内守り書留め申候自害之仕合御法申候

十ヶ所ハ右之輩皆薬りいたし打続て寺坂吉之助千石

当地仕居申候其頃之度の一巻ニ前後揃申候江戸小

居申候兄弟所猶致て居申候ハいかまし備て一ヶ所申候ハ

磯貝十郎左衛門申候此段ハ御座候通ニ付六忠左衛門改ハ御存

思召候得共申上候へ合見居一

候而ヶ様之中ニ能き待二涼て罷在申へ

別なく國入申候事ニ御座候

一　忠左衛門申候ハ各天道申候

大工町居申候屋通ニ牧橋の銀出申候

又一大八三

申八屋丁三日丁

申銀

通りの事とも申候得ハ右之趣申達内海道遠信とも志居三ノ戸

其節ニ五右衛門も同心致し候て申遣し并彼方にて申候よし

此後も七郎兵衛ニも申候大石殿方にも伝候得ハ勘解由

其外共ハ無之船人ニ近付候兵各ニ初而参り候処

此節も申候得ハ早野殿こそ御一同致候て式道信とも分

藤兵衛ハ能内道遠の申候二条一礼申候浪人二日野家居

ノ申候様ニ羅之藤兵衛申出候ハ此の其江戸仕居申候与藤左

衛門と仕其ての志ニ付其方ニ而候様ニ付如何仕候得者性

御一分ニ候此会申遣し候申候故其の書状共ハきとく千万ニ候

義と存候処ニ其志ニて得心仕候由申候而其後ニ右衛門と申人

ニ相頼ニ申し候処後ニ能登申候ハ其江戸表寺大坂相

之由候ハ方々申出信濃申遣し其申候京都ニてハ寺井

其後父子ニ而海ニ会候申候而信濃ニ申候浜子息ハ

其本ニ而申由ニ申候二条殿の御内海道信殿大石内蔵助

方様ニ而射候て大方申候て京都海道手紙ニ而何申候由を則

趣被申候段ニ御座候而通ニ其て与兵衛殿ニ而申遣候处任せ

之承り別し十右衛門ニ申候与仕居申候者の二三郎ニて相渡

此段下同じ相違無御座候存生之内ニのこし申候極月候ニ

臣役日名平八に而戌壱封之角差上ヶ申候處此後漢之
道具平八道信居申而此宝物何も御座なく其之上首尾之儀を承度
私方へ参り寄之請け皆様方へ申上候平八申候之度の
一巻の書押入申されある付の書付差出し候へ何事も調差不申
此之間前之国を差上ヶ平八申出押し置候御事を私方より
取延引候之道信居申候押し置之心得申候戌壱七
差留め候事御座候事

右札

此後内海居信方へ差上候得ハ京都寺井喜兵衛方へ案内
右之中を見せ候所押差之の通得し申置かり切抜キ候八字
越中守撤之通何事も見え申之而方差出し増候御座候

常哉戌原差上申候内藤何之助に申候村井源之丞殿御奉人
御本家拙之御心入能申候佐右衛門殿御名差上申候
越中守様御内御懐之様御座候御礼申上ヶ候
入置御座候由御座候新町中越
越中守様京都御屋敷へ向ひ候御届申候割之差出候二八
先年戌之御細入之御座候去年能々御座候何方も御礼申上
永拙も親御子孫も御拙御用御見舞申上候
節八之御座候御見舞申候御年入抔御内藤御世話
十月分御大坂御座候二月三日之御事を御届申上候
事八御大坂御座候事中御座候と申上候御座候
御世話御申候八御座候申上候御大坂御座候
下中屋御心入御座候入申候拙月十八日大坂御座候
兵通方之入分中御越中守様御座候
拙者出居大宗中以て名氏先佐倉先之御座候御大坂御座候
中又一所戌御本家之傍之未通之内存候候

一　京西高辻申候ハ東町呉服所定る大坂出入一件何と申者
無之と存候申候御仁ニ而法外之事ハ調相成人も
有之候得共右之者呉服所ニ相成候只ニ出入ニ呉服やとも八
有之申候而中出候而東町ニ而京ノ三井手代を申遣しも有之申
候而京都之儀者御用筆ニ以御何之儀申やとも東町ニ出入之
以前ニ而者申候而東町ニ而十月七日安御沙汰ニ而参候
申候三井手代拾月廿一日京都ニ御用筆ニ書付申遣申事
此三井手代京都之御用相成候而御用書付ニ而申候
京都ハ御用申候御後ニ而相済申

一　何連之儀申候ハ何方より火事之節と申候御何哉相成候
ニ付御申候而直参ニ而御手頭と諸用申候而ハ御座
候得共右之儀京都ニ而被遊候而御座候と仕候御座候
得共右之中付候と申候而其方ハ御申候と御申候と何と
之者儀ハ申候三十村御直参候申候ハ火事之節御ハ十七人之
御座候と申候御首尾相成候御申候而御申候申候御申候
右様の儀ニ付相成候右之申候御申候ニ付天下之御礼
とも及候御儀ハ天下と申候御直参申候ハ相成候ニ而
こと候而御座候而申候而御座候と申候御申候而御座

長尾与之進申上候ハ此度出入ニ付定而奥之御尋茂
御座候得ハ拙者共儀召出之上申上候申上候拙者共ハ
御城大番衆御用ハ相勤罷在候御尋ニ付無御座候得共
之事共ハ一生之内見申候存申候申上候

一
堀田下総守様申上候ハ高田飛騨守申候無本意いつ頃ニ候哉と
申上候三拾弐三日於江戸申上候ハ私儀高田作長重行ニ而
両将仕居申候御尋ニ付御尋被成候御名を申上御礼申上候
其外九人之儀も右同様ニ御座候者共仕合難有奉存
私初御咎之儀者右之者共ニ御座候遠慮仕罷在候御事

一
承候ニ付申上候一事も無御座候覚申候右之通申上候
既ニ先年江村宗閑右御縁之訴私ハ聞と存申候申上候
御同人之意趣之儀其上ニ堀田十郎兵衛いつ頃勤申候と申上候
憶合ニ上覧心ニ付遠慮ニ居住申候御心安無之候と申上候
申上候ハ十郎兵衛儀初而之御事私共ニ仕様も無御座候
御入其中右之様子承前之出入之段御尋なと
追而御調申上候右之通申上候
由申上候ハ其後十郎儀勤申候覚申候
申上候御様子仕候御尋之儀御座候

先年長崎御町奉行被仰付候ニ付浪人分ニ而被召連
長崎江罷越候所二人之者御差添人ニ而搦捕
候ニ付牛込内藤助四郎と申者ハ大事ニ候得共夜之
私宅へ参候処抱仕候所忰之男ニ而候者ニ而御座候
不男之者ニ候得共其後彼ニ勤候中老者ニ候へ共
此者ハ心掛も宜候段其後ハ用心無油断
存候ニ付心懸之男ニ候ハ大事ニ申武士之冥加ニ存候一段之事ニ候
様ニ付知人ニ申候ニ付御請ニ被仰付候ニ付無恙候
大藤成田伊兵衛小屋ニ罷在候ニ付知人ニ咄候よし申候

一
御先手安部四郎五郎組ニ而御座候間宮一平八与申知人ニ御座候ニ付申候処
伊藤与一右衛門と申知人ニ御座候ニ付伝ニ仕候由
武州在ニ候処八木市左衛門と申者召抱候處ニ付候段申候
ニ成候而見合候所御抱申候ニ付内藤助ト申候へハ只ニ市左衛門ニ
以御抱ニ相成候ニ付四ツ過ニ御抱ニ相成候ニ付門前ニ而又右衛門と仕候
私ニ候儀ハ以来仕合ニて千住之知ル出候而仕候内ニ相勤
候処ハ能召抱候ニ付内藤助
申候ハ候ハ千住ニ而候ハ申付候
其上市左衛門以抱候又何様之

ニ任せ置候由ニ御座候、保養も手伝仕候得者、殊ニ御座候
後去ル仁ニ御座候ハ、毛頭ニ御座候、又ハ年寄共も、何分ニも宜敷
若輩ニ而居候内ニ御座候得共、御座候間、歎ケ敷ニ御座候ハ、得と御心得ニ而毛頭
成ル事ニ而相成候時節ハ、心安く申候而、先ツ此度の儀ハ、世の為ニ
御座候と申候得ハ、志も有之、人ニ隠シ居候処、又ハ外ニ而御座候
而人心得申候と申候、其故ニ、持参人ニ内々相尋申候ハ、昨年も
手伝申候間、労人ニ相成候者、人ニ依而も申候前ニ而居申候間
田畑之者共ハ、高ニ而割合ヲ人足ニ、存候毛頭無之、段
相成申候而、難有存候、様子承申候事

一 平地九郎左衛門殿御申候ハ、労之者ニ而此度六ケ敷候様子ニ付、御返答之儀
中ニ而難儀之者共並ニ諸事御掛り被成候ニ付、御書付之者ハ、九
郎兵衛ハ此度、右之者共ニ申候ハ、相談ニ而遣シ候ハ、此度の事ニ而、相済
さ申候事
一 何ニよらず、時分の為ニ、平常相勤候、太平記出し申候、我等老人
ニ成候ハ、目鏡ニ而も手伝候、調ニ致せ申候、持参仕、三日之内ニ返し可
申候ハ、言上ニ入申候、と御申出候、日ニ平ハ御所々へも申入候
一 吉田忠兵衛ニ、筆墨硯貝十枚ニ而掃除ニ遣し候、御申候事
或時平地九郎左衛門、茶碗ハ、出来ニ而唐油ニ而、買候様ニ御申候、払

ふるきと茶ろ汁の多きを吾村家ニ進 持参めされ候由ニ而
致申候を押見ハアノ流ニ而也らし 愚ニ然ルを去リ候ても有之
存候を致し候ハヽ能々致し候て後ニ冬ニ至リ候て今般
持参仕候事ニ而 茶請仕候を持参致し古来より仕候を
申候也 此之ハ何も妻子共ニ夜の茶湯ニも用ひ候者も有之
仕候て皆々感心 色々て能致申候 無難ニ而済申候 銅吹し
内ニ料理ニて三度之分ニ御引ハ如何申候様ニ致申候 中揃候を
勝ニ申候 此致無難ニ而有之候事 地を仕度致存候
宜しく何もの志 天下の御恵ニ而候と存候事

一

一 助太夫ニ申候ハ十五より致候坊主と成 相談名先云法業済
之様申候 則内々助申候ハ談之由 右名えと可申候 秋白骨
打成候様場所果り 鞍進を乗と矢申之ハ存候申
二而も候と流物何遣も御座候と存候て
之儀仕合と何れも座候と申候 持参申候ハ打
一 致し名聞ニ初而名聞を得申度安
様子 志何れも一日仕候事て
天下の御恵ニ 候と存候事
一 或時御用又 申候ハ持参之 事 八

松平伊豫守様ニ居申候 池田三左衛門ハ四国入佐候節ニ召出申候
次男宗家ニ上月名字の家ニ由緒御座候と召出申候 拙者申候ハ其
其上上月文左衛門と申 福嶋様出頭後 城代仕候 子共老又
之勤申候 親肥後守代ニ召抱 太夫文左衛門 末子ニ八左衛門と
申候者 能登仕居申候 私親と成申候 親と申者ニ而
能登仕居申候 太左衛門八左衛門ハ 右之病死仕候 今ハ孫の代ニ成申候
申八代当主申付候 池田主水様ニ御座候と申候ハ 拙
当家代之内召出候 拙申者 入置き 其後 至極
此頃地下ニ之半被 備前国 下津井ニ相勤 信使

有之候節 加様ニ御刈羽中小性組と申者ニ直様召出候へ
此申候 千保内蔵助 其ニ申候ハ 拙者儀 無細候而覚居候 生ハ
私母ニハ伯父ニて御座候 伊賀ハ従弟ニて御座候也 申候 右拙者
申候ハ 上月八左衛門兄ニ上月三右衛門と申浪人 京都ニ居申候 此者
の娘ニ備後殿 親文七 羽後ハ と申候 無細 拙者
此覚 左様ニ三右衛門娘ハ 申候 私之祖母ニて御座候 切腹ニハ
子共無之と申候 拙者申候ハ 右之文左衛門子共御座候 覚候
私親と成 別ニ御座候 拙者 文左衛門子共 何も存知不申候 能登八左衛門ハ
此頃当家何出申候と申候ハ 拙者 無細ニ存候 伝承在之候

松平安藝守様ニ平地名字之出來申候と被申候得共ハ
無御座候平地遠江守殿同名之御座候平地名字御座
候之由ニ申候安藝守殿ニ御座候ハ如何程ニ可有之様ハ
不存候と申候御序書物中ニ太田忠兵衛殿出羽と申ハ
池田信入公之御嫡子紀伊守様と申候信入公と御父子ニ而長久手の
御合戦之時井能名紀伊守殿同時ニ討死被成候其御跡ハ御
弟御輝政と申候三左衛門殿と申候其御子伊予殿
先祖御嫡子後出羽守殿ニ而三万五千石之
家老ニ而居被申候出羽之二代目出羽ハ右之筋目ある

仁ニ而御座候此蜂須賀蓬庵公の御嫡男ニ成被松平阿波守様
御弟ハ太田出羽兄之妹婿也太田阿波守殿
智ニ而御座候其孫出羽守殿御母之兄妹ニ而御座候御母
妹池田出羽御國方ニ居申候太田出羽御代ニ下津井ニ而知行
也被申候事ハ継之候時後ハ二男ニ而申候
代之心安御座候と申候先祖池田之御家ニ居申候
継之候内蔵助継之ニ被存候様ニ構不通
不出仕申候
一
内藏助ハ構申候ハ大石勝母後之儀ハ如何と申候ハ勝母路也

只今迄樹木ハ出来不申候　越中守奥方　本源院殿去ル刻
右屋敷御代官ハ我等母方より請取候而罷在候此度罷出申候処ハ
其上請取候而樹木ハ植置申候
一　我等町宅ニ罷在候平八ト申使者ニ於ゐて立寄申候て羽織差遣
是迄請取候へハ側元請取申候様ニ相成候ニ付十人之者方一所ニ相見へ候ニ付而
何レも大小携申候者共ニ候得ハ不残相揃せ来候てハ一段之事ニ候
此三人携之者之内用之義有之候得共侍之様ニ相見へ申候而其
刀並金弐三枚之札入申候而品見ニ相成候而相済申
不残在候由申候　平八申候ハ携之者三人携ハ此小者ニ而有之候

是振候て不意ニ刀を抜候て其外申候て廿五才ニ相成申候
平八用事と申候て相済申候得心仕申不届之私ハ平八
私方氏家平八同名平之丞傍輩之者罷有申候者私ゟ四人ハ
皆々居合せ候を招寄候用ニ而も御申候由左之者共
其後申候て然所を指居申候段々無之候ニ付思召可
然と申候へハ兎角之道ニ候へ其上にて御座候と申候て相渡し
申候何角平八申候ハ挨拶いたし行衛を申さぬ者
平八申候得ハ相もし候申候返候へハ曲者相渡し置
正利之刀抜せ気附候打を申候而右之通り申候平八

然也申候ニ付、それも遠し候而毎ニ存候し節ハ此ことに
内藤殿御振舞せられるべく候由申子ニ及候て其ふかんのこと□内ニ
所候而生け置候し候ふ寄麗成力ニ而見ニ而同利も有之
求候申候ハゝ拵し脇差ニ拵之内蔵助殿子ニ而振舞候処ハ日本
武士の習ひ於子計に而存候申候処ハ御分平八ニ□□候申候
手綰横山町ニ而右之銭ハ申候ハ太之無平八申候ハ一度ニ折節
居候所ニ御座候此内右平八儀申候ニ付答申候拵之候ハ
中ニ平八を所振し候て寄御□申其答ニ□所望申候
事ニ御座候是より其中の事存申候□かこ□古長谷川

仁左衛門と申仁庵ニ而御座候由江山城守殿ニ御座候
と兼而ハ妙解院様御代ニ八百石ニ而被召出御国元ニ罷在
節京都ニ而御出入仕候て京居申候て見知仕居申候由申候
ハ此所ニ而男ニ而御座候て拙者も細川家に罷在居申候京都ニ
居申候右之御方ハ則此之者ハ只今拵也候ハゝ此処居申
何しも申候ハ見申候る男ニ而御座候下ニ而仕候さにハて不拵
有之候て定て候ニ而□候と此拵候申上候ハ同様御座候
八百石ニ而御座候と此得意に而候所候千石ニ而も拵候而も候かた
之候也拵之儀ニ付此銀拵五十挺御祝ニ我等扶持と割ニ而

難申候張ハ不承候共内勿論出来ル子共ハ父之恩と申訳無之
諸申候御作ニ茂無毋ニ而も生長仕候而ハ大之誤ニ而心安
相成ニ臨候得共中々ハ何事子孫之ニ術ハ毛ハ長概無之
申候共之所ハ長柄十本斗目立ニ毛勿論纏持ハ又何しも深山
之足一ト党也此所ハ鍛心をも生し永々他家へ至り纏持之類
無之所自然之所迄人ニ先へ集[illegible]中纏々持纏
とれまでも不為又長物ハ今日大纏を用申[illegible]申候
持纏の類ニ至迄纏持多候付つる無數大小ハ之ニ持物を
持参而已自然ニ而付人不如無申と心ニ而持申候武士の

本ニ之此所ニ而申も専ら武家之太田新後表定紋の道具
之外ニ之者ハ大之仁相應之所陣候家代初る此國ニ之所依
申付御馬之ニ之如何之所出馬仕り能ハ之所御書相仕候中々其も五割下
様成ニ而其者の書入之而用之申候外の事之成威光友申候
時相成[illegible]相成し馬之乗馬[illegible]思案も可申
是非之馬[illegible]見候申一ツ其力共不
武士たる者の好ミ[illegible]一ツ[illegible]
申候比類[illegible]此[illegible]之文[illegible]
古仁ニ候ハ武[illegible]仁ニ而御家歴々の

古来の仁義ニ而候得ハ御茶湯申候事ニ而諸人是ニ付候ハ法外
後世ニ至候而ハ猶更ニ而候得ハ長々申付候而ハ甚敷盛
相成候儀ニ而御座候事

一

二月二十日当代ニ而者千宗旦より内弟子ニ而候内記殊ニ
御座候処此家来宗旦茶道ヲ受候而被為致御座候
相成候節ニ付候而御茶湯之儀西ノ丸江参候而被仰付
被成候而も筆之者并角倉延ニ付候而此道段々相続
二ツ之候ハ大ニ相止候而其儀習ニ而年頃ゟ御礼
申上候節ニ而御城江罷出候而解候得共其節ニ而安心仕候

御城坊主ニ而被仰付候ニ付、其以後奥村 宗旦と申者右之節
茶湯稽古申付候而御城坊主の様ニ而存候ニ付而表向ニ而
仕候得とも其内弟子ニ相成候而ハいやしく稽古之儀ニ中々無調
中と申ニ付而何も茶道を相勤候而御大家様ニ而出来候
茶湯之儀も皆々蔵ニ而被仰付候而者宗旦之内義御相伝ニ而内証候
何れも茶湯御相伝難成候而茶道太方ハ御同意ニ而相成候
下之申上候様ニ付而可有之候ニ付茶湯之者共以来御法度ニ相成候と
歳ハ申候而右之茶道之者ニ御法度被仰付候以後上ニ而相勤候
ま之御用ニ付而出来申候ニ付初而茶之湯の趣ニ而可申候御

自ら差出候長崎より新規之人定之御用物相勤申度
之儀ハ九月ニ奉願候得共御達之上御伺申上呼出し可被仰付候
候事ニ候

一
二月二日之朝当番之節出府ニ付拙者共内蔵助無造作十郎
兵衛三人ハ一度ニ御目見之席ニ罷出候
十内殊之外御機嫌下戸之者ニ候様ニ仰付候ニ付内蔵助被申候
中将ハ御同道ニ候而此ノ節之御様子六人之内ニ而六十郎兵衛
手前之御儀委細之申上候様ニ被申候得者十郎兵衛
御機嫌之儀内蔵助殿ニ申上候得ハ此盃ヲ下され候と存候

二通申上候ニ付被申候ハ拙者共ニ申付候と申候申上候
一盃頂戴仕候被申候ハ拙者共ニも被下候得ハ一盃頂戴仕候ニ付中将殿へ申上候
殊更又御申聞之御盃を戴候と申候又拙者共被申候
さし出し一盃頂戴被申候様之通り被申候又少々頂戴仕候ニ付九郎兵衛
と被申候者ハ頂戴仕候内蔵助被申候ハ十郎兵衛ニも只今頂戴仕候
ハ御機嫌被申候上ニ而一盃頂戴被申候又被申候中将ハ六十郎兵衛ニ被申
ハ先ニ頂戴被申候様ニ被申候御目見之御様子ニ付候上ハ御免
と申候と存候と被申候内蔵助被申候十郎兵衛ハ無別儀候
中将ハ御機嫌之よし被申候拙者共ニ被申候間退出仕候

居まても通り候処参る樹ニ而者右口ニ追込候処差出し差遣之

ここと申ス共相替言ニ而諸群申候其根免し上下致申候いらすも

何より諸致申候様子ハ是ハ毛海ニ渡し庭ニ集致申候様子存候ハ

時分の心を一番承り坊主両人預り致申候御座候ハ居合申候趣と

居申候右寺坊主共ハ大通りニ寄律院相替何々合し

住申之事村別る世上の様子見致し義相申成致

尚又中様皆々同様候る体見致てて宜様何しも申候

様ニ宜而者切様の様子多く成致見申候し右而存候

此る内形勝文を持致流移ハ右様子此体何分持追申

之節ニ而正月中より御説の事二月移りを日光ニ而御續申

取も夜を掛ケ候儀ニ候ても大何連も江戸切支能致候

此様二月移り為成と坊主何方を持致申候口へ存寄

此事のことも別而持参致申事

一　二月三日之取次を以吉寺へ相越まいり御請申

長辰殿進申候成と成候而御常集殿

花と相成御用ニ而茶屋流持参て

住持存人殿紙持参此申候謝御進

何も申と申而次之庵之坊主を以何進し

来りとも節句申候得ハ仮名遣も一と中年々追申
候ハ拙者何連も心安申候と見へ申候て当時相衆申候由
私と存寄之趣如何様定候て仮名之三人ニて代々之家
いつとても仮名返事之一箇申上候六ヶ敷申候得ハ何かと追
拙者へ申越候段申候ハ手紙御座候大方ニ承知候ニ居候事ハ両度
且其馬大石殿始何もと存候所に申上候而御ハつかて御延引之由
此所御不案内之者一々之申聞置候ニ付而も尚其私の儀度宜敷様子
於屏風之親子も堀町本挽町の端粗忽の手紙杯仕候連
よろしくと驚申候而様子奥田孫太夫殿田又之丞奥野将監殿

よき事ニ申候ハ只今迄拙者へ申候而ハ兎角何の様ニさハぎ申候
て八ヶ敷申候得ハ一々申候而も内匠殿へ申候而手紙をも遣し
申候様にて実ニ申候而拙者存候ニ付而不通之様子見せ申候而も宜
ことにと存候て孫子夜も安申候処孫之丞殿内匠殿思召も相成候而ハ仮名文
と成候と申候而得ハ只尚兄弟之様子申聞候而も左候ハ只今存命候
此義とも御念入被仰下候事

一 翌朝早々申候処も孫之丞様何連も難有由申候而仮名林
去ル節代々之気を乱し拙者ハ何心なく向後も申候て御座候申候
又頼み申候而左候得ハ只今迄之申候ハ大石様より之拙者前の

扨分限ニ應し候ものとも何れニも手習之段此中ニも沙汰
職人商人之事此中にハ手習算用を致候ものも御座候其内
坊様方ハ何れも手習ひ候事難成無事ニ候得共
とかく身のため何にても手習とも有之候事別而
肝心之事ニ御座候安楽居申候共其身の為とて読書何事
坊様方ハ手習ひ申事ハ無之候と此中にハ相止メ候ハゝ何心あつて手習ひ
此何事ニ不限何事も前方取計候様此中にハ私儀前ニ而手習セ其頼
之前ハ何時ニても銭にて下々迄も申候ハゝ何れ平生も見合此
申上置候扨銀子此田之両家いつれも手習を勤メ申候

此中には相勤候ものも皆々請合候様此尾張屋ニ而此中にハ
相手を別而誠手習方迄手習ひ候ものもある事此中ニ相止め置
料理之事ハ何時ニも八代り幾度も見合平八ニ而相勤候申
可成他家ニ参候而も店申ニ相勤候見合可料理致
進物之為ニも是等之事ニ申候可成約束ニ而申候由
料理屋橋之名など申候共申出候者は何時なりと相勤
九つ時より申刻迄夕飯など下宿ニ而小性衆抔同様ニ
居風呂なとへ申付候相手ニ而料理屋橋之下ニ而六つ
平生相識之馬を申付候様なとハ追々是にも宜敷と

かれ一旦仕覚候を断ハ無御座候得共稽古致せ小性にも乗
らせ申候ハゝ諸事すて丹太郎乃尾氣 丹太郎ハ能覚候て
通り候ても捌き候ハ近頃存外目録下通乗増上手之門前
ニ至る 然共得度せず乗す遂けれ居候ハ皆之上位ニて
私儀用之事により別而差出新堀に出て候ハ篠田軍之助ニ
追々軍之助日頃之仕候て云業掛り候得共稽古に打事
其之由通之角 打手去候ハ後此当前ハ广キ而之様を
家息を入させ手坂ニ下さしむし 息を入させ自身之
勇人たるは此馬を捌申候ニ仕置事手関する上達海ハ

何也も乗上手之名を申候ハ是月客者も能候ハ小笠原ハ乗上手之
事ニし余之所要用仕候て丹太郎ハ外余申候ハ如月上度而之道
此申候ハ業之出来ル續き候ハ挿せし斗馬より外余申候ハ度ニ是従
申様と武藝之内子別る馬ハ生物成ニ家ニ其心を持候て終焉ハ
只今勝負馬故稽古致す事申候ハ得て人様申候ハ又致す
物ニ候ハ畜類ニ候て乗乎御乗之藝之上手ニ寄申事ニハ有之
心の儘成事と申ても捌き候ハゝ時何ぞや稽古之時亡父
并に乗申候上手ニ致候ハ武藝ニ藝才之名ハ能キ武士ハ
若ハ末から申候ハ武士之不知事ハ多く有之候事ニ付申候

御仕廻之上中事　御酒被下　御覧被遊候　様子ありて御向之事ハ一人宛
万人をあはせ仕あぐる事能く会する者　大勇と存候事

一　惣じて庭之さき之頃　何れも内料理拵候節ハ右之通
献立料理ハ料理出候　趣意ハ相伝ニ候而申候
何も不罷出候而相応之処をうかゝひ　趣意諸々
色々手前振舞之節　何れも合点不仕　振舞候内料理拵候
申候内之事　乎人合点仕通申候　与振舞ニ及申候　何れも
旅仕舞申候　料理を八木方支　上使御座候麻
上下之分　御内何れも思召　二三之小袖　御賞ニツ

一　麻上下　上常宝出候　様子　御肴　御家
助　拵　腰ありて　申候事

一　四季之絹着出　内御　何　花　不如
御　内　自身　候　御
十七人之　何　上　庭　出

一　上使　御使番久永内記　御書院番　御
時分御側衆　者　御
一下至　事
諸理内通之儀　勅使　御用　仰　吉良上野介

を及刃傷候上野介殿額中を不浅疵付候所仕形不届ニ付出仕之
殿仰付上野介殿も無恙候而驚動候而も宜人之怨を散申すとも之
内匠頭殿家来四拾七人致徒党上野介殿宅へ押込殺候也
旅宿へ上野介殿討取候仕末公儀を恐忝存候所ニ付切腹
申付候者也ニ十七人之者名字一ト通り読ニ相知れ候へは申付候事

一
内匠頭殿所持之品ニハ如何様之者ニ候哉 御用之節ハ何程も相成候すへく候て切腹
之節御尋ニ預候処則難相渡候旨御請申上候其上又拾七人之内
蔵助ハ何ニ付候哉振之申入候ニ内匠頭殿志願之段申候ニ
振之申入候所之間を軸而も候へとも申入候ニ無拠内蔵助ハ

一
蔵之助并右之者共 泉岳寺ニ而何れも内匠頭殿墓所
四十七人之人ニ而御屋敷ニ付候処中ニ何れも不寄只屋敷江差遣
助太夫側衆付太刀ニ而相手之者共助太刀候者出し申事

一
上使ニ参候節も相渡不申様と存候而御付届進候ハゝ
内蔵助殿と申者何ニ不寄其節中ニ堀部弥兵衛ハ懸進候様ニ致候
是ハ内蔵定ニ清意而成とも定之進及之進候為
抑々被仰付候上ニ而相手も付内蔵助上ニ而相手振相成り候
仕合 御意ニ而趣申候所何れも承服候ニ付而大方之候
中ニ而存候ニつき其中ニ而刻老人而已ニ有候内蔵助側之者共候

中候ハ哭ス不申候得ハ内意助ニ御座候御家ニ而御難儀ニ付
と存申候ハ哭ス申候此後も別ニ召抱申度存候右妻子ニ而も
召抱申候処其後村井半左衛門ニ申付候此年頃ハ何共難儀
御座候而も得と相考候上ニて御意ニ恐ル御意之程

一 篠田軍之助取扱之儀当人共ニ相尋候ニ付別而心安罷
多存候ニ付定法ニ相背ニ付申候其上仁躰相応
女房之周旋ニ而上申候処召仕居候ニ付申候事とも人
ハ無之候得共

一 何事ニ付申候而ハ別而一切之無調法之儀も出申候而ハ内證ニ申候心安

哭申候而ハ側ニ寄り盃ヲ取扱候事

一 何と存申候ハ今日ハ召出御地無用御茶不
存候と御尤此ハ調子扱ニて又候旦申様ニ付
何事も不及申初め之様ニ付取扱免角
威候事ニ付女ニ被仰付可申と存申候

一 日々呑申候而ハ何事も出来不申候事
此後ハ平人ニハ申候申候内證ニ而御尤申上候
中々候而何事も此申候内意之而相済候申料紙
硯等持参ニ而相認之由申相済申候而方二申候

其元ニ而何そ御用も無御座候ハヽ一寸御出料理被成度奉存候御調
度候ニ付内密御願申上候助何卒御出被下候様奉願上候又御
頼申上候ニ付思召も御座候ハヽ宜御頼申上候何卒御頼
下され候ハヽ宜敷被仰付候ハヽ七ツ半時分ハ入申候ハヽ御挨拶
側よ岩江参七ツ半申候間御見附度御出可被下候不
来候ても後ニ而御座候其上ニ而御見せ申上候ハヽ宜候ニ而参
大ニ慰候て御用意被成候ハヽ御調可申候御頼申上候ハヽ尤ニ而
此間も御地ニ而難有御座候然ハ又此大側ニ而
其元ニ而御頼申上候ハヽ何分思召宜敷御頼可申上候

ころ迄御咄も致候而御座候御座敷ニ而申候ハヽ御免御座候難有
無沙汰成候ハヽ遠慮候て御供ニ可罷出候得共御用被仰付候ハヽ八幡迄参
通り此度ハ御頼申上候御見舞之為大西坊へ御出候
御暇天気能候ハヽ御供ニ而罷越候海辺申候ハヽ
申候ハヽ何分当分ニ而罷出候
申し度中々取込候
大ニ側ニ寄其元別
中吹候
大西坊ハ八幡ニ寄候て私の家ニ
此今ハ大西坊ハ
私共も

一　吉田忠左衛門儀ハ内々ニ而咄申候儀、伊藤十郎左衛門ニ心安候ニ付、申候事

右は
十郎左衛門儀は本多中務大輔殿ニ居申候、在江戸ニ而
存寄内意を通し申候仁ニ而御座候事

一　原惣右衛門ハ大工封書状差出候而下之天野屋申候内海
屋信濃、大石内蔵助と申者ニ以前存寄候、某
具ニ申候事

一　片岡源五右衛門ハ宿中申候処、亀(?)惣兵衛、泉岳寺江被参
申候先之趣、御用之由申候、浅野内匠、生前之儀共申越
候て申候、則其夜、林兵助、泉岳寺江参り申候

咄申候ハ、只今之所も原惣右衛門咄之趣申候、堀部之儀一々申候
と申候事

一　間瀬久太夫儀ハ、先比御預り申候所、兵之儀殿中悪敷存候
今朝分快気仕候得共、存寄通と仕合候、万一病気如何ニ存
候処、道具類之儀申候、積り之儀、後ニ御気遣
ニ被為成候、随分御座候と申候得ハ、聞候由申候事

一　小野寺十内ハ筑前(?)、松妻并子共、大石内蔵助申遣候
申候処、振子京都江引取、大石内蔵助之儀、伊藤(?)申候へ妻
方へ参り申候、申候ニ付、太郎右衛門引取候儀、御座候

且別て迚も御心安思召候、八郎義も存候而尤安堵
可被成と存候事

一 関ニ拙金清八ハ何共相応ニ取計候由、尤其節ニ辞世ノ歌
口上書ニ有之候事

一 儀兵衛十郎殿ハ此度別而御心配ニ而御世話被成候、足軽毎
の事ニ而何れ近日ニ可申遣候、将又御意ニ而御念被入候事

一 私母ハ日前ニ一旦罷帰候得共、御安思召候得ハ、快然致候事

一 猶々清八儀内々ニ而御地ニ而御取計之義、一通り承知致候而御内々ニ而拝見仕度候
尚又御地ニ而何事も御頼申上候事

一 近江屋勘兵衛殿ニも此度兼而厚キ御世話ニ相成、右甚兵衛
共ニ此度之儀ニ付、同人共心底ニ仕合相叶候様ニ快気仕候様ニ相成
候事共右講者雑用多致度申越候、長福寺江も文通致候
よろしく御心添被下候様ニ御頼申候、右之段を申上候、文通ニて遠し
可被下候事

存生之内ニ松平谷中長福寺文通ニて一通り頼置候事

一 当方木村助蔵ハ此度別段相勤候処、十五丁目より内藤助殿ニ指控被成候ハ
右之吉良様金清ニも之度之仕形不届ニ思召候而、絵図之通り
遠藤安芸守様ニ而被仰付、其儀之節取調候得共、以之外之出来事ニて

深意ヲ以上樹ニ於テ老母ノ心を祈申ハ候と
祈申候而候ニ付安思ひ出候処禅世ノ路名を其前ニ書
呉申ニ一袖ニ添付致シ候

春帆独咲

習婦れ君ニ為れい　　蜀変助右衛門戒谷

先ニ云ふし人ニも有ケ里ケルか日乃経の旅ちを思ひ出シ一首
其後助右衛門寺法事ニ長延寺へ参り候処位牌ヲ見ルニ右ノ
戒名并ニ君筆ニテ金粉ニテ書有之候日付ヲ見テ振も哀
助太郎ハ存生ノ内出船ヶ所節ニ咄シテ社氏とも申し候民間

追而申上ニて長福寺ニ住持助右衛門存生ノ節ノ咄ヲ示申置候
其存生ノ内出入致候子ニ小出久千代根ハ勤居候由ニ候得共頼人
ニ候ハ申聞ト申候得ハ逆息長久ニ存候由田村右京殿家来
惣兵衛右衛門と申仁の所ニ居申候江戸ニ出府致シ候事

一 瀬田又之丞ハ禅世殿之舎弟ニ御座候哉於前ニ右申上候
播磨国加納村小寺村日国加古川ヶ小寺村ニ五里程之在ニ
六千石を日かし当ニ調候ニ世ヲ逆ニ有ケル兼ての所ニ其内ヲ
略ニ相願候而ニ下ケ去ニ存候由ニ候

瀬田氏

武士は常に志を一筋に思ひ立ねる心の構へ肝要り

一 早水藤左衛門ハ前原の家ニ居候処早水助之丞へ申候ハ
咄し候ニハ貴方ニハ此間も御古郡の光明寺ハ勝之備
賀茂執役の者之川ニ居候而者を覚候処継承光明寺
三十年ハ昔ニ而此方ハ候而聞其ハ古人之事世を以て候て候由
此ものは目出度追々及候而申候る辞世謹

早水氏

地水火風空の中より生まれ身の是之候本の住家ニ

一 赤垣源蔵ハ武ヘ申候而小身舞来難有候霜月御相続候

御料無之所以後無事ニ而其時ニ此時ニ尽切腹
仕候其上二而一言申上候此者被申付候
以其後役勤居申私遂者之ハ是之申候根ニ其候申候
度ハ二而存候事ニ而以心安思候由申候ニ而候由申候

一 奥田孫太夫ハ内之咄申候ニ一緒共ニ此御申候由申候ハ被申
何迄も我等居候而申候得共私ハ切腹仕候而も御座
存申候ニハ此者ハ仕申候ものゝ此ハ候と存申候故撲申候ハ神以誓
候ニ之ハ申候事ニ而三寺ニ小姓様のせつ之ニ迄及三寺
此門前其肩衣を以此ハ我ハ内ゟ之切候而秘申ニ肩衣ニ

手を付ける所へ南助太夫罷出乍恐十郎兵衛初として様
に致し候書付差上候処首を御討被遊候
下され候様申上候得共延引致し候処其後
首を討候て居候中に取上置候処後に林五郎村井忠左衛門
様も三人の者共に申上候処何れも様御覧被成候切腹に
場へは七郎兵衛殿始十七人計り罷出候今日は
切腹致候者共御意之通被仰付候何れも茶たてこれ有候申
出し少も恐れず静に見物仕候者之所存之次第誠に感入候事に候
以来し下され候事

一 矢田五郎右衛門儀も内蔵助被申付候刀を打折候右手の刀指替
申候一段兵は家事と一段見事に働候を致申候中に通り申候と
申候場所其後申候かし候処御内意を以御通し申候中に
後刻御奉行松平伊豆守殿家来吉川善右衛門息子
とか申候松平隠岐守殿五十右衛門伯父と申候太夫次郎も見届申候
切腹仕候節は頭も申候子息儀十郎も今程は小疾も無之候
先生仕居申候て十郎兵衛も存申候

書入

儀十郎は御預ケ被成候に付矢田五郎右衛門内縁に付て切腹
為致方に居申候也八十ヶ所迄御通し申候

一 大石瀬左衛門儀世話人又之丞ニ而段々首尾能相済候由
申候得共此方ニ而知人ニ頼且又御座候 ニ付 一申上候
深様藩ニ而相頼候 家来人八右衛門三平親子三人ニ而知人ニ御座候
申候 是ニ 前ニ相勤候段 申上候事

一 右十七人共ニ御座候 死の義存寄ニ而内蔵助殿 [illegible]
八木市左衛門両人ニ而段々相勤候 切腹場 東内右之通内蔵助殿
と一所ニ而相勤申候 附 御座候 存寄之通ニ而 掛り内蔵助殿遣申
候得共 [illegible] 申候

一 右之通段々相勤申候 附 吉田忠左衛門 八木市左衛門両人ニ内蔵助殿

内蔵助殿何連も首尾好仕廻候段承知仕候様ニ付御請申候
相尋候へは首尾好との事故申候先以各様御丁寧ニ存候
存候段仰聞候得共役人何連も [illegible] ニ付御座候右之趣
申候得者民部平八相尋候処右之段あの首尾好御座候旨
答申候

一 右之通ニ而切腹相済申候 場所ハ芝の大御殿院の御座敷の先ニ而
駆付候 向ノ方ニ而 御書院 大御書院の間の
御庭ニ而 出見有之候ニ付 場所 [illegible]
[illegible] 内之事 [illegible] 候儀

呼子笛吹候ハヽ何事と存候共早々駈付早速御手
捌申事、此度手柄之段左衛門相志之勇士共ハ此度之働
能申聞候、且其上之御意皆々難有存候、扨難有事共
何もいて此節之様ニて難有存候と感涙を流し申候得共
此三人之場所ハ清水中ニ而山名伯耆守殿御屋敷前ニ御座候
前之此者共召仕候得共無之所と浅野殿御法度ニ候
伯耆守殿ハ大御目付ニ而御座候ハヽ定而様子も思召候ニ付
し申上候得共、手柄之儀此者共御褒美被下候 此者共其場所ハ
此通之名前ニ而出候と御挨拶被下候由ニ御座候由

清水之様子なれ共五六歳頃ハ何事と存候哉、御法度之江戸中
ニ御座候ニ而召捕候得共、町人共中々以支
一 右之通ニ而相成候処、夫より思召ニ而度々御褒美皆々江も被下候、八十七人
之者共之手柄ニ付、忠勤之様ニ付而此者共様々事ニて相成候ニ付
此者共仕合之者共ニ而候、此者共へ見舞ニ参候由ニ而殿様
泉岳寺ニ而参り、村井源之進様重ね〳〵八木帯刀殿
ろう様之様子とも、此者共仕合者ニ而長持ニ入泉岳寺へ
持参し候処、夫より今宵出し候ものを取出し申候、内蔵助
十六歳之方十内、源五右衛門之ニ父子も段々申候

一 内蔵助着込ハ右之紺之緞子小手同 掛て有之 合果申候
縫りハ何も無之 同前
一 片岡源五右衛門礒貝十郎左衛門両人共ニ内蔵助同然ニ緞子
之着込 同然ニ候事
一 十郎左衛門衣類の内ニ白き小袖ハ布ニ而香袋の様成物ニ入
不相知候ニ付所々尋候へハ存候ハ法久寺ニ居候時ニ此ハ
夫ハ母親より有之候 十郎左衛門出生之時寺ニ参り候
若年之人ハ知る間敷候 何も母思難有とて請
申候由 御番之者へ相渡候事

一 小袖者十内着込ハ黒色の様なる絹ニ而 布西国中形
の紺緞子也 鼠色ニ染候の外ニ家紋とも大男とハ存申候 中
大きに見へ申候 定而刀痕も有之と存候事
一 何連も下着白布ニ而 着物の内ニ着込入置たる様ニ而
衣類結び絡の名札有之事
一 甲冑類火事場のごとく上を黒羅紗ニ而包 白羅紗ニ而へりを取
其余ハ居中嘉兵衛良雄とある分ハ 内蔵助名前ニ而
有之候 何連も大ニ通ひ候事
一 忠左衛門 吟味結ひ振 申候 年寄 内蔵助中ニ 要ニ申候

人ニ無益ニ難有事も無之候卑劣ノ色ニ而何ヶ寧ニ出
之有猶し忠義之儀在様成儀も無之候ニ付大切ニ存申
由ニ而精勤如何様ニ入申を見申候哭共ニ挨拶候御座候
末ニ至リ格別ニ而ニ不限何連ても家臣ニ覚悟の所
もちヶ若ヶ者抔茶入ヶ申振舞押も不相済ニ細ニ而も気ヲ付ヶ
無益法も成内も取ヶ申候色ニ而も大形者ニ而申候

一 十七歳之比行状ニ而世上ニ有候者ヶ申候

一 大ニ無益之出世ニ夜食ニ及戦ニ如様振舞抔ハ湯漬杯ニ而
九ツ過ニ仕出所も一晩ニ而状も寸ニ勤申候刀も抜ヶ果算抔
以候事

一 二月十六日ニ上ニ御座候而何連し御傳申御為ニ宜御座候而又
ト仕候得共何連も上之儀兎角ニ存者胃我申候此御座候ニ居申者
之御事ニ木盤ニ目前ニ而思ニ而相も上役ニ拾七人ニ勇士とし
上ニ見候へ共御ヶ然ニ思候者井十ヶ条ニ而不ヶ承知致候而
何とやらん上を仕法ニ相成申者ヶ思ニ而悉ニ宜定ニ極候
以来の所仕法ニ思召切候程仕合ニ無之此他ニも無之
中節ニ而不存候ニ而一寸紙も無之候ニ而ハ切腹にも遅速ニ而無之
何も揃ニ而勇士共ニ思召得ハ上申出の事ニ而とも継ヶ宜
仕合出し一揃之一家との御意ニ出来者共ニ引取も勇士共と

三度迄御意有之候 誠ニ七人之衆 其外之面々迄 難有
奉存候 落涙仕候

一 右之御意を承候而も存出候 恩田孫左衛門義ハ 五十六ニ而切腹
仕候 相果候ハ 若年ニ而隠居仕候 様 六十九ニ而 切腹之節見届 習ニ而
有之候 若輩之 強キ 中ニ而 六人之勇士達 何れも 上手ニ介錯ハ 押付候
不覚ニ而 心得而 中ニ生而 下輩を 不忘 因事ハ 若年及切腹 有之
一 存候ニ而 此段 相心得 能々切腹之仕様 要 任せ 存様
三 存候中ニ而 能々 仕達 様ニ 談合 被申候
急度 相 志

若輩者共 不憚 御意之通と 末威ニ而 御座候 助左衛門 高名
存生之内 相 御振ハ 何方迄も 難有
末代迄 所 御 由 相 以而 難有 存候

一 二月九日 同名 位牌 江村
一生 今日之
昔を存 御意 三人
老人共 定而 御
白
仕

志ゟも泉岳寺の坊主共ハ此度之儀ニ付大振ニ付居
未練之者共此儀ハ對し不届思召候趣被仰付候との 由也
一向噂も無之候由申候得共押而御尋可被遊思召ニ
寺内之者も意と申候ニ付又被仰候ハ此處存寄申ニ付抜呆ニ而罷居
申候得ハ寺之表ニ而御僉議被仰付候ニ付御申付七日ニ相成
申候得ハ何と能も難申上委細ハ表へ御出ニ付存居申候無事ニ右ニ委細も相成
ハ誠之以仕合ニ奉存候と申上候ハ若衆中へ被仰付之御意難有奉存
候事ニ而申置候様被申付御暇之上帰
ニ仕候と申上候由

一 右之通之候処御前様ハ一統御満足ニ被思召候
之儀承知被遊候ハ伊賀守殿泉岳寺御預ケ置
在之候内海しやくも参申候得共大目付衆ニ申候ハ何かと
存候趣被遊候儀ニ付若衆ニ而御詮議御座候得共
極老之仕合御座候ニ付七年ハ存知候太守様へ
御預ケ之衆へ御披露手一人宛寄合候ニ付而江戸表ニ而
御申出存候得共詞懐中仕居申候御座
然中之儀無之毎度気之助之段ハ不申合
然とも仕候時ハ色々御座候而相勤不申候ニ付候

申候ハ　公儀御代々之御恩思難申尽御事候ハ御当分大恩
を以御領家中之者共上下元来子孫迄もごく三十万余役難有
思召候存寄御座候御儀ハ御恩を忘候様ニ被存候而御座候
左江戸共ニ清浄殿ニ出かけて相成候由申上候
上様之御領之儀ハ別而忝存候家老共茂御尋御座候
然而拙心底ニハ至極忠臣と存候而何とも存候由申
以之身を恥候知世中者左様存候而中ニ可申候
越中守存候御儀ハ拙者共振々可申と奉存
御儀ハ先々存思召候日本大小之[illegible]

情ニ而中道茂御座候中に何連も候中書物之中ニ而
当方(?)御座候呉服々拙者共ニ御座候ハ[illegible]
中筋を申候存候私儀不忠ニ相成候
御存候御座候中々拙者共ニ候
右之外御役中御差上候御座候由申候
退去仕候而太夫之役之一動御座候中に大ニ当日子
[illegible]御座候中ニ廿万ニ三中ニ三十万石
下向之御座候中々年別三十七月
廿日之父三盛三十三年忌日無非之後歳人ニ相成候

之旨申置候処 妙解寺へ内礼同前者共之白石条
諸侍ニ左様申候而 吉良左兵衛申候ハ旅寺へハ役当様ハ兼
申出候事申候得ハ亡父以の外結之様申候而御代々忠原り
妙解院様其后越中様 三斎様御賞翫被成候其上別而
取ニ以後妙応院様高御代々四代様能々被申
其上仕縁ニ而親兵其身ニ候ニ而御家老申候
旗本家継被仕候得共候ハ拙者二代目世上
人足以下其身吉良ニ中入候而様ニ候妙内ニ御孝成事
立候迄ニ而安人家諸代ニ而少し其身ニ而亡父ハ右之

志ニ申候寡人様ハ別而彩歎入候て御命惜ニ存
生存ニ候得ハ伝中大形其四男ハ恨ニ子共之内覚申候
旅ニ而難有存候而相過之人々候而相勤候ハ之候家共御命ニ而
拝見存候而母子兄弟ニ而過之候ニ而候間何達し候申
以上ハ亡父兼而親ニ而申付候而兼而候事ニ而
熊退申候ニ而存候亦達不申候而委細を御ゆ廿一日以后

日の本の名を揚ぬる武士の鏡とやいはん四十六人
おかし候

未
二月十九日
堀内伝右衛門 判

堀内勝助殿

一林兵助村井源之進掛り三人今度江戸御評定所二而令詮議二
在所之者共書付を以申出候ニ付振舞之儀被仰付候段承知
仕候得者同人共右被申渡し候趣を承候而如此
可申候旨を以御請申上候處右被申渡候処共人上下之者人数
御下知被仰付旨御請申上候得者御心得仕候
及人数人見届候由御請申上候 申上候

一同年三月十六日久右衛門京都上京由候処江戸表へ人々内ニ而御咎
御役人共を以て申付候処 林兵助村井源之進始末
代々上之者共其段申上候 同年九月中旬迄以書付

中に直ちに内津軽越中守殿以内大石主税外九人
伊勢十郎左衛門杉本左兵衛殿以内内藤丹右衛門右之者共二礒貝
十郎左衛門貞柳一両人之者貞柳之外此者共之人々
古今集中に十郎左衛門杉原様并外ニ宗右衛門
二度之事并又人相中に留置候者共母義共
出羽之助兵衛尊氏濃州長延并十兵衛大名之寺町具之二
の親子之東山道久兵衛谷中喜三郎宗右衛門左松勘六
堺坂之文良八丁堀杉本伊兵衛掛候佐吉主夫之者與力町
吉川茂次郎内新之丞矢田郡左衛門伯父之佐十郎小林与吉

不申候様之趣相心得申候右掛合之儀も相済申候事
罷在候事
一 八丁堀同心 松村[illegible]儀 以之外[illegible]
申候而右[illegible]及申候 右智と申人
八丁堀ニ罷在候申候[illegible]承候而[illegible]
申遣候[illegible]儀員士族[illegible]以之外難義[illegible]
[illegible]智[illegible]其段[illegible]以之外[illegible]
[illegible]相違[illegible]以之外[illegible]書[illegible]
内々儀員[illegible]及申候[illegible]御用[illegible]

[illegible]来[illegible]又十郎
[illegible]小性[illegible]知人[illegible]
[illegible]候申[illegible]人[illegible]
[illegible]以之外[illegible]
[illegible]
以後[illegible]
一 同九月廿五日[illegible]
[illegible]大[illegible]内[illegible]
御[illegible]十七人[illegible]存生

之由被申候、只今御当地拙者老人ニ候得ハ重而拙者義不定ニ
存、暁之子泉岳寺ニ墓所御案内被仰付候様ニ頼申候ハ
候得共、被申候ハ御寺も千万之御事ニ候得共、則并ニ御同心候得共
時中来候拙者、則墓所之案内ニ任せて出家壱人出申候、墓
所ハ本堂ゟ前ニ坂を下りて、内匠頭長矩公之御墓所ゟ
少下ニ四十六人之墓一所ニ並之、垣結、口ニ錠ヲおろし有之候
大勢の男女見物人も有之候と存、其外老人ハ鍵を打明ケ
香焼拝来候、拙者拝候、拙者も参之刻、上下志申候、侍壱人被参候
参詣之人被申候ハ、不審思召候、私も参詣拝し申候、被申候

一 三人之出家、両人ニ華之附候、御拝参候て、指図申通り
右之通候中、荒井渡し申候、本所ゟ申候日十月十日比京都之
住人拙者申候、荒井寺申候、荒井寺白砂縄の曲もの
寄持参来候、早刻参申候、来候之拝見候、候と申候
御存之事ニ候、御在候様と申候ハ、御当地之御用幸井御座
参候事、申候ハ別而御越之事、申候、御寺之刻ハ拝参
申候由、被申候之体、拝参申候所、御拝見申候、御参り被参
住人ニ而申候、手前之事ニ候、通れ不申候、方々参見参候
父子共ニ宿之所ニ参申候、古来の人々之事、父子之 小刀拝持参

仕置ニ可被仰付候哉と奉伺候

玄渓儀ハ京都柳馬場通押小路上ル町ニ而内匠頭抱へ
相勤居申候処京都ニ住居仕江戸詰ニ而罷出申候
江戸住居ニ而居申候内内海外記家内匠頭抱ニ而勤居申候ハ
江戸ニ罷出可申旨申遣し候得共右之者共ニ而何れも同志の沙汰宿ニ平生ニ
合申候由承及候ニ付手前不申候者共ニ而何連も存生
之内御糺申候事

一 玄渓申候ハ於江戸内海外記方へ何連も存生之内援兵
知人無之由旦那道法方へ申来候ニ付相糺候得共其節志願無之
御私別而申来り候内蔵助殿存生之内極月十八日同十四
日二月晦日三通参候ニ付徳内与四郎申遣候十内六兵衛方ニ一月

三日迄は存候得共申候ニ付其節
相願候得共呈不申候ニ付越中守殿被仰候ニ付相糺候得共生き残り候者共ニ付他ニも罷越
及候得共其諸事ニ付申聞候ニ付相糺候得共難申旨申出候
叶不申候ニ付其節申上候得共申上候趣難有仕合ニ存候
其節申上候ハ何連も存生之内其節之難申候而難申候趣申上候
右之者共申出候ニ付相糺候ハ申出候ニ付則申遣候
申候得ハ安兵衛申候由則子息玄庵罷出申候旨申候而

一 其節右之者共申付候ニ付此度今月十四日ニ相糺候
吉良上野介殿屋敷ニ押込候而屋敷ニ居合候由申来候ニ付申候

此度雖討捨之本意上野介殿討取之泉岳寺於于
侍亡君之御前ニ而去年已来之鬱憤此度大慶
仕候然ル上者御法度之儀を存定而先達而吹聴ハ路
次第ニ而も今程之帰参候間右之趣達而委細仕候間有
荒増之義申上候得者御前様ニ者能々御賢察之余命も
存候内生涯之儀無之事ニ而御親類共御心配加申候難
有奉存候何卒御通路ニ而御座候而罷出候得者右之段相頼候
之行末武運之至付候而如是ニ至候事ニ候右ニ付此段
余命之内如此御座候恐惶謹言

十二月十四日

小野寺十内 判

原惣右衛門 判

大石内蔵助 判

寺井玄渓様
　　人々御中

追啓此段去年之冬以来同志之者共春屋之内ニ而仕候而浅野者
此書之遣候ニ付而為可申候嬉敷存候亀山赤穂子孫ニ而看之
和田喜兵衛与申者ニ御頼申ニ而候寺坂吉右衛門十四日之

喰候と存し候得共被為成候八ツ時過帰宅之段申候処
候以上
追而一札之事ニ而相違無御座候得共何分ニ茂広御頼申候
候此者共申上候以上
又申候得共拙者其所存ニ付身分御請仕候と申候段御返候
不仕様ニ被仰付候以上
　　奉入
　　此文言之通相認置候御法度之儀ニ付候と相認申候
　　請取之内拙者ニ而被相守候神以致候と申候
　　結構ニ而御座候此者共ニ申候以上

一　右之通書付一通写し置候処ニ申候此者夜の次第ニ
　　御座候ニ付右之者共ニ付拙者ニ而承知仕候写申候処御座候
　　方ニ而書置候京都之儀ニ付前八月六日之日付ニ而申遣
　　候其外ニ付拙者仕候通之所拙者之國ニ而申候写と相成
　　申候得者仕易候写之通と申達候得共又写候様申遣
　　一筆啓上候箇条之通ニ被仰付候得共得と相達候
　　別而御座候秘之通之度一同ニ御下り之者共拙者相済
　　候様ニ而も申候通此下りニ而御座候儀と存候て書付を破り候
　　其趣意一向ニ而無之候元来御為ニ而万事相済候様御座候

皆ニ而も時節ニ而も　強健ニ而も　万一人口ニ可差障　平生
未練之族ニ而　勿論　戦場ニ而　警固役之儀　第一之事候ニ付而ハ
尚更分別　戦場ニ其上之儀　是迄心懸　布可理為能可
存候　身命をいとはす　身を捨候へ共　随分　其覚悟仕候
之も結構候事ニ　定而世帯之者之数　度々年月ニ
寸志を能以存候共　[illegible]　一附者　[illegible]
一ニ此等志を被致　此段以書面申述候　[illegible]　奥[illegible]
被顕之時比　[illegible]　太[illegible]　[illegible]　掛御目
可申達候　[illegible]　被　無[illegible]　備之儀　御座候　十八日

両様ニ而　右之通可申趣　兼而御座候
八月六日　大石内蔵助
寺井玄渓殿

一　玄渓父子被差越巻物　被入御念候由　御座候と存候　掛御目
此度安否之事ニ而　此度御尋被下　刻玄渓　御座候
其上御心之段　無之　内之一冊以附候　其中ニ有之候
定而以附候　初中後之志　其存候ニ一冊玄渓父子ニ　新ニ[illegible]
中ニ以存候　覚候ハ　知せ可申候

一 其後父子ニ而御供被致候処 伏見八幡大坂江も来テ
居申候 而借屋も有之 主人替候故来リテ居り候よし申

一 伏見京都町筋銀座二丁目ニ升屋源右衛門妻子引借宅
致居候由ニ而 其名前書之所へ相尋候処 足へ申候而逃出
訴申候 召上ケ申候 御所を出 訴申候 清宅申候ハ 御聞ニ而返事も不致候 然ル
及承申候 源右衛門子 所々出入 取調之由 四月ニ掛り其後かく申
笑之事 此中申候 依頼候 清兵衛方へ申掛 四月ニ新ニ参
事件へ申居ニ承申候 引請候得共 此度右委細相見申候
御通掛ケ之由 御尋ニ寄之由 訴申候 者無之 一同相違仕候旨申上

右之仁名前不分明 主付不申上候

一 淀川舟方上り八幡大西坊へ罷越 其後淀ニ而相尋候処
相成候ニ付 座敷ちよつと相見ニ掛ケ相成候由
其此中内ニ夕飯出 色々馳走ニ相成 大西坊并金蔵
と申者 兼々内蔵助訴申候ハ 大西坊ハ内蔵助家筋ニ
候由訴申候 其段只今ニ大西坊ハ実ハ浪人ニ候 一九
堺ニ申候 公儀へも差上申候由 存生ニ内 此訴申候 何とも子細
一向存不申候ニ付 此者罷越不申候

一 大坂天満九丁目 浅前通 角屋之内 あか屋次郎兵衛借屋樋口

香盾ト取ニ而申由　和田喜六ト申ト申候ニ付取集ニ而右衛門
大坂寛ニ而申候浪人ニ而恵鳥ハ娘男ニ相成
候ニの江上方を拘集も仕候も明朝ハ城中ニ而發足ニ而今
夜ニ成候ハ何とも仕候も無之候玉評ハ可急ニ而七人ニ而等
ニ而義用ニ而申ニ而差用人方ニ而取集申此者義延川ニ而仕と為ニ桂杉
仕候ニ付差候申ニ而申も存相も満足ニ而夫婦ニも合子
五ケ年其志ニ而上と少屋道筋仕候此意度存候此義明朝
取ニ而乱元也娘ニ而存と申ニ而候ハ候ニ条依志ニ而合子ハ進候
得ハ出入候歌動申候て記を相申候ニケ様ニ相分り別ニ而小分ニ而志存候ニ

無之口惜存右の趣ニ而京都伏見八幡大坂候ニ而何も承知
可致ニ而候ニ而承候ハ早速相居承知大坂町与力大塩
平八郎ニ承知ニ而申伝天満与力屋敷ニ居申ニ而通ニ取揚も
實父ニ而通申候と申ニ而取候大坂道筋申日数此も
右之和田喜六ニ相申候ハ取ニ而召捕通し其ニ而と申ニ而取調
申候書外召捕右之御中京都伏見八幡大坂所ニ而江戸
申ニ而死ニ取集申差出シ来ニ付を以差出申

一　和田又一儀ニ付相手吟味状差遣申候

左衛八

播州加古郡小条村ニ而候ヘ共元文と申者ニ而以前同国
加古川本陣中屋与九郎ニ奉公仕候ハ右小条村ニ而不通而申候
右小条村へ度々罷出甲里と申候
一 右之状并和田吉九六、三橋定八三人への状を江戸表
中務方様小川伊兵衛十兵衛元文を申候而申候七月六日ニ表
候ヘ共渡シ与兵衛ヘ七月廿二日状を差出申候
一 大坂ニ三月九日と日付ニ而和田吉六方へ手紙状江戸ニ差遣申
無筆ニ付状之書状差出候越中守家候ヘ結構ニ相成候
身分御沙汰之後元無申遣冥加至極難有武運

子長件申来候元文病死ニ付右之趣申遣候ニ付不浅
存候委細之趣状申上候
一 同年十月十五日大坂甚仕相郷申同月
廿日甚仕同日御沙汰出候仕候
一 右之趣書状差出候武蔵勤上下仕
以前定人而大之一統申候差友有
其仕申候
挨拶申候
志之通申候誓言ニ而

御申上候処少も相違無御座候以上

元禄十六年未十二月十六日　堀内伝右衛門 重判

堀内勝助女

一 宝永六年丑七月十六日於江戸先年浅野内匠頭様
家来四十六人御預之節子弐左衛門儀就夫教覚ニ付
御出被成候由ニ而富森助右衛門子息富森長太郎江戸御屋敷
江参候処氏家平九郎小屋ニ被参候刻口上之趣承届
其上氏家平九郎方より書付之写

以手紙得御意候父助右衛門切腹之節御世話ニ被成候段承及
候処堀内伝右衛門助右衛門忰長太郎
様之儀御越下候様と被申候依之頼置申候右衛門
次郎様へ御出内記殿へ御尋ニ而御念入候
以来難有存候由承候以書状
可申候得共御手前御取込ニ候故其元へ申入候伝右衛門
方へ能々被仰達可被下候
御座候以上

七月十五日　富森長太郎

氏家平九郎様

一 右之通拾子相成松方分も同年九月十一日使を以菊家
長太郎同半蔵方ニ助太郎母弟も一所ニ居候ニ付金子遣シ
書状相添遣ス、同十二月十一日附ニ而返書来ル、其節両
家共中も相分り拾人扶持長太郎江被下候由申来ル、初
継ニ長太郎度太郎通成人ニ相成候ハハ仮ニ而も一家相立、大越中守様
ニ加賀守殿之助御預り之御子孫ニ而無御座候ニ付廃亡ニ

一 京都寺井玄渓方へ丑八月廿四日之日付状、同十二月廿三日出
而申来ル、同廿四日ニ返書調申候、横田吾兵衛方江も申候、玄渓
よりの舉申面

一 第跡之儀以来以出申哉不申上候得共喜八郎ゟ
申遣候ハ前々ゟ御座候御手紙ニ而も承候様申度候由中ニ扶持被下
置候上ハ其後扶持等ニ存寄候、去年京都ニ而見候以後ハ知恩院町ニ引込罷在候
横田吾兵衛殿ゟ申越候、同人儀去年五月ゟ吾兵衛殿同居仕候
中沢主計と申者、先年浅野家ニ被召抱候ニ付干今忘不申
在京仕居申候、元来右ゟ申遣候義、以手紙申上候事ニ付何分宜
ニ委細相頼候、以書面申候、折々申上候、大石内蔵助二男
三男也、但馬豊岡京極甲斐守殿家老石束源五兵衛
中ゟ内蔵助妻之親父也、則内蔵助妻者源五兵衛

両三居申候ニ二男吉千代と申ハ当三月上旬ゟ大病ニ而
大三郎と申ハ当年八歳ニ罷成候処、当七月十六日於江戸
病死仕候者御教免与仰付候、大三郎儀出家不仕
候而も不苦、世話可被成様相願候、親父勘之丞も鍛冶をも持せ申候ニ
仕度との念願ニ御座候、大慶ニ存、則右本孫五三郎ハ当地
御当請ゟ出会申ニ付甲斐守様へ御預ケ置候ニ而去ル石分
左京殿ニ而手合左京殿ゟ[illegible]持参毎度出会申甲斐守様
之大三郎殿ニ而出会申候段申上候処、甚致満足候、御家
のみ申候、不仕合と存候、甚ニ申候ハ、気許　大守様へも宜敷頼

ニ仕度存候、先年内蔵助へ右　御懇意ニ而御意ニ逢仕合
存候之様折柄御心掛ニ成下置御長キ仕候　大守様へ
御世話被成下候へ共[illegible]様ニ依候右様之御難題申上[illegible]御無心
申上候義甲斐守殿ニ而持参申候[illegible]申渡
御対面出会ニ御伝存念之元段御聞届候　大守様御耳ニ入申
度存候得共畏入候、出披下と御申候、何分宜御覚ニ
可被仰聞御意同志候之元様御家右年出会出来
御頼ミ申上候、以上

八月廿四日

寺井玄渓　判

堀内傳右衛門様

一右之書状同年十月朔日着候へ共、返事遅延ニ付、追而本調
横田富吉方ゟ相認て申来候趣
八月廿日之書面十月廿二日相達、御答ニ不及候得共、御一家
無事候由にて、御先年御安否共御尋問被成候
平ニ御座候趣承知仕候、去年ハ当地大火ニ而御類
焼ニ御座候由、如何様之様子ハ相知不申候、横田富吉
向ニ被成候、富吉事八日ニ御七ケ相成候由ニ而存候ハ
大石内蔵助殿二男吉千代八歳之六月上旬ゟ大病ニ而去月より
挫之候病氣、依之相続ニ付、内三男大三郎殿御事

当年八歳ニ罷成申候、当七月十六日於江戸先年来御預ケ
御赦免被成、御預之所御赦免ニ候、御母
公へも御願被遊候所、世上之覚モ誠ニ可然、追而御見舞
相叶申候、依而為御悦此度大三郎殿儀御用向ニ而帰国
御出生之事、当国之御母御方、御下向ニ而御申上候
大三郎殿之御母方ニ而御預ケ、不依何等ニ甚不宜事ニ候
京都御本家ニ而申上候所、御本家之御断申上候
御本所ニ而去夏より上京ニ而寺跡之御預ケ申候
其後甲斐守殿ゟ大三郎殿之事御尋之御方ニ被申候

清揃子ニ御座候得共此小家之儀ニ付此度ハ此気之毒ニ思召候由
此節ニ存し候ニ付越中守殿ヲ以被仰渡し 大三郎様御事ハ御幼年
右揃子儀ハ遠慮ニ付召出し遠慮御免之上ニ而越中守殿
上御目見仕候ニ付御家督被仰付同所ニ而見仕候処ニ而も多く
中之只今用人共ハ此度仕候中ニ付候而猶成揃子ニ付候
若御私方内々助成も被仰付之内別而思召も相成
日本大切之事御座を以テ御念ハ御深切ニ付御座
大三郎様御幼少ニも有之候ニ付思召候
以思召ニ而御頼ニ付候度御座候ニ付及申候以上

既心安ク候処私儀人並ニ御座候て掛恥ニ罷在七十
五ニ候処御意ニハ将修助ニ候て中々違罷在申候同名之者共他人ニ而
心安ク請候者共ニ委細申含置申候間御懸ハ越中守へ被聞し
ニ其ノ様之義行届候者共とハ前々ハ人並ニ申候而太越
今度此節之儀ハ一式之私儀存寄ニ無之様ニ此心安思召候旨
御ニ御座候此段不相止〔印〕被仰別而兼々其儀誠ニ以江戸住居
ニ御座ハ此中心得ニ而七里余御座候而難有儀ハ妻子共ニ在所住居
中ニ而も難中使者ニ而不存ニ而罷越申候処同名共之者共迄
一も能々心得申候而其身ニ精勤候様ニ申付 以上 御請申上し

八 二十

堀内傳右衛門様

十月廿四日

寺井玄渓 拝

乃鈹

早稲田大学図書館
011688990485